

『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法 (3)

上野牧生

1 はじめに

本稿は『釈軌論』(*Vyākhyāyukti*) 第一章における、阿含經典に含まれる語句の「語義」(*padārtha*) をめぐる議論箇所⁽¹⁾の翻訳研究であり、前稿(上野 [2010] [2012])の続編である。「語義」に関する『釈軌論』の議論は、大別すれば、以下の四節に区分される。チベット語訳『釈軌論』各章における各節の配置を括弧内に示す。

- (1) 一語の中に多義がある場合の語義解釈 (= 第一章中盤)
- (2) 多語の中に一義がある場合の語義解釈 (= 第一章末尾)
- (3) 上記 (1) と (2) および下記 (4) 以外の語義解釈 (全 103 例) の個別事例 (= 第二章全体)
- (4) **paryāya*, **lakṣaṇa*, **nirukti*, **prabheda* という四つの観点による語義解釈 (= 第三章冒頭)

このうち、本稿が取り上げるのは (2) である。⁽²⁾(2) は、複数の語の中に単一

(1) 堀内 [2009 : xvi] 所載のシノプシスでは、語義 (1) に「一語に多義」(多義語) と「多語に一義」(同義語) との二つを含め、語義 (2) を空欄にしている。しかしこの区分は筆者と異なる。筆者は語義 (1) が「一語に多義」(多義語) に、語義 (2) が「多語に一義」(同義語) に相当すると考える。詳細は本稿に示したシノプシスを参照。

(2) 「語義」(1) については *vigata* を除く 13 術語を前稿にて取り上げた(上野 [2010] [2012])。「語義」(3) については論文名を改めた上で順次取り上げる予定である。(4) も前稿にて取り上げ、当該の語義解釈法が『瑜伽師地論』「摂積分」に由来することを示した(上野 [2009 : 13-16])。

の意味がある場合の語義解釈例、言い換えれば、同一の意味をもつ同義異語 (paryāya) 群を註釈する場合の模範例である。

先行研究では、山口 [1959 : 174-7] が² (2) の大まかな構成を分析し、僅かに部分訳を示した。また ASSAVA and SKILLING [1999] が最後部 (本稿の 2.3.2.9 以下) の内容分析を行い、校訂テキストと英訳とを示した。NANCE [2012 : 146-52]⁽⁴⁾ は (2) 全体を英訳した。SKILLING [2000 : 320]⁽³⁾ と VERHAGEN [2005 : 582-3] とが (2) 全体について簡潔な概論を述べた。

以下に、前稿で取り上げた「語義」(1) および、本稿で取り上げる (2) のシノプシスを、先行研究に含まれる翻訳研究の所在と共に示す。

1 「語義」(1) : 一語の中に多義がある場合の語義解釈

1.0 総論

1.1 *vigata* (山口 [1959 : 171-2] ; 宮下 [1983 : 10-2])

1.2 *rūpa* (山口 [1959 : 172-3] ; 上野 [2010 : 72-3])

1.3 *anta* (山口 [1959 : 173] ; 上野 [2010 : 73-4])

1.4 *agra* (上野 [2010 : 74-5])

1.5 *loka* (山口 [1959 : 173] ; 上野 [2010 : 75])

1.6 *āmiṣa* (上野 [2010 : 76])

1.7 *bhūta* (上野 [2010 : 76-7])

1.8 *pada* (上野 [2010 : 77-8])

1.9 *dharma* (小谷 [2000 : 41-2] ; 上野 [2012 : 1-2])

1.10 *prahāṇa* (上野 [2012 : 2-3])

1.11 *nyāya* (上野 [2012 : 3-4])

(3) ただし SKILLING によるエディションはデルゲ版の異読をかなり拾い損ねている。

(4) NANCE [2012 : 138-48] では本文に付された注番号と文末注における注番号とがひとつずつずれている。そのため本文 p.147, no.41 は、文末注 p.252, no.42 に対応する。このずれは本文 p.138 に注 no.25 という表記が誤って二つある点に起因するが、本文 p.148 に注 no.47 の表記を欠いていることから、奇しくも p.148, no.48 以降はずれが解消されている。

1.12 *karmānta* (上野 [2012 : 4-5])

1.13 *skandha* (上野 [2012 : 5-6])

1.14 *saṃgraha* (上野 [2012 : 6])

2 「語義」(2) : 多語の中に一義がある場合の語義解釈

2.0 総論 (山口 [1959 : 174])

2.1 個々に語られるべき〔語の〕意味

2.2 包摂された〔語の〕意味

2.3 目的の意味

2.3.0 総論

2.3.1 標挙の説示による「目的の意味」(山口 [1959 : 175])

2.3.2 数的表現の説示による「目的の意味」(山口 [1959 : 175])

2.3.2.0 総論

2.3.2.1 経典に数的表現が説かれた「目的」: 第一経文

2.3.2.2 第二経文

2.3.2.3 第三経文

2.3.2.4 第四経文

2.3.2.5 第五経文

2.3.2.6 第六経文

2.3.2.7 第七経文

2.3.2.8 第八経文

2.3.2.9 諸仏が遊行する7つの目的 (山口 [1959 : 176] ; ASSAVA and SKILLING [1999 : 16-7])

2.3.2.10 声聞が遊行する15の目的 (ASSAVA and SKILLING [1999 : 17-8])

2.3.2.11 世尊が安居する目的 (ASSAVA and SKILLING [1999 : 18])

2.3.2.12 マハーコーシュティラがシャーリプトラを訪問する15の目的 (ASSAVA and SKILLING [1999 : 18-9])

以上のシノプシスのうち、本稿は§2の翻訳研究である。さらに試訳を提示した後、§1.1を除く「語義」(1)(2)全体のチベット語訳テキストを提示する。

2 『釈軌論』第一章，語義 (2) 試訳

2.0 総論 (LEE 25.24-26.4; D śi 37b6-7; P si 42b3-4)

多語の中に一義〔がある〕とは、例えば、異門 (*paryāya) の語の如くである。さらに〔別の解釈では〕、三種の意味がある。

2.1 個々に語られるべき〔語の〕意味 (*pratyekaikavācyārtha) と、

2.2 包摂された〔語の〕意味 (*saṃgrhītārtha) と、

2.3 目的の意味 (*prajñānārtha) とである。

2.1 個々に語られるべき〔語の〕意味 (LEE 26.5-8; D śi 37b7-38a1; P si 42b4-5)

その中で、「個々に語られるべき〔語の〕意味」とは、語によって語られるべきものでもある。例えば、「無明を縁として諸行が〔生ずる〕 (avidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ) という中で、無明とは何か、諸行とは何か」というようなことなどを解説するものである⁽⁶⁾。

2.2 包摂された〔語の〕意味 (LEE 26.9-26; D śi 38a1-4; P si 42b5-43a1)

「包摂された〔語の〕意味」とは、意味内容が異なる諸語の要約された意味なるものである。すなわち、⁽⁷⁾ ①有の十二支分に関する諸語によっては、要約すれば、三雑染〔すなわち〕煩惱 (*kleśa)・業 (*karman)・生 (*janman) という諸雑染が説かれている如くである。②同様に

(5) 以下の二例を含めた三語の還元梵語は山口 [1959 : 174] の推定に基づく。

(6) この語義解釈法は、結局のところ、『釈軌論』第三章冒頭に位置する「語義」(4) において *lakṣaṇa と呼ばれるものと同一である。「…とは何か」 (... katamat) との構文のもとに「…」の定義内容を説く語義解釈法を、ヴェスバンドゥは「定義」 (lakṣaṇa) と呼ぶ。上野 [2009 : 13-6] 参照。

(7) ゲナマティは『釈軌論註』において次のように補足説明している。VyYṬ D si 152b3-4; P i 16b7-8: 「そのうち、無明、愛、取の三支分は、煩惱雑染である。諸行、有の二支分は業雑染である。識などの残りの支分は生雑染である。」

Cf. MAVBh 21.22-25: tredhā saṃkleśāḥ. kleśasaṃkleśāḥ karmasaṃkleśo janmasaṃkleśāś ca. tatra kleśasaṃkleśo 'vidyātr̥ṣṇopādānāni. karmaśaṃkleśāḥ saṃskārā bhavaś ca. janma-

不信〔の父母二人〕が、信を円満にするよう、発奮させる (asrāddham [matāpitarāṃ] śraddhasampadi samādāpayati ...) 一中略一 慧の悪しき者が、慧を円満〔にするよう、発奮させる〕 (duṣprajñam prajñāsampadi [samādāpayati]⁽⁸⁾) に至るまで、これらの諸語によっては、要約すれば、〔生天の〕発動性を伴った繁栄 (*abhyudaya) と、〔発動性を伴った〕至福 (*niḥsreya) との要因を正しく収受させる (発奮させる) ことが説かれている。なぜなら、「信によって戒などを実践し、戒 (*śīla) と捨 (*tyāga) の二つによっては、〔それぞれ〕身体 (*kāya) と財産 (*bhoga) との円満に含まれる繁栄が〔来世で〕獲得される。慧 (*prajñā) によっては、至福が〔来世で〕獲得される⁽⁹⁾」云々の如く〔だから〕である。⁽¹⁰⁾

2.3 目的の意味

2.3.0 総論 (LEE 27.2-5; D śi 38a4-5; P si 43a1-2)

「目的の意味」とは、〔世尊が〕お説きになられた諸異門の意味を説明するものである。それら〔の諸異門〕には、「個々に語られるべき〔語の〕意味」もなく、「包摂された〔語の〕意味」もない。説明されるべき〔意味〕は一つに尽きるからである。

samkleśaḥ śeṣāny āṅgāni.

- (8) 当該経文は『釈軌論』第一章における「目的」(prajojana) 定義箇所 (VyY LEE Ed. 9.13) などに既出のものである。Avadānaśataka や Divyāvadāna に平行箇所がある。Avs I 205.5-7: yas tv asāv asrāddham mātāpitarāṃ śraddhāsampadi samādāpayati vinayati niveśayati pratiṣṭhāpayati. duḥśīlam śīlasampadi matsariṇam tyāgasampadi duṣprajñam prajñāsampadi samādāpayati vinayati niveśayati pratiṣṭhāpayati.
- (9) 当該文脈における「身体の円満」は「健康」「長寿」を、「財産の円満」は「財産の獲得」「欲望の諸対象を味わうこと」を、そしてこの二つの円満に基づく「繁栄」は「善趣に生まれること」を、そして「至福」は「聖道に入ること」をそれぞれ指すと推測される。
- (10) 出典不詳。なおチベット語訳『釈軌論』では、zes bya ba de lta bu la sogs pa という引用符の直前に引用される一節は、経文の場合もあり、経に準ずる先行文献からの引用文の場合もあり、ヴァスバンドゥによる解説文の場合すらある。ここでは暫定的に、経に準ずる何らかの先行文献からの引用文と判断した。

2.3.1 標拳の説示による「目的の意味」(LEE 27.6-28.7; D śi 38a5-b3; P si 43a2-b2)

同様に、「標拳」(*uddeśa)⁽¹¹⁾の諸語も、「詳説」(*nirdeśa)とは異なる、説明されるべき意味をもっていないから、「なぜ標拳がなされたのか」という、「目的の意味」が説明されなければならない。

【例1】『比丘尼経』(Bhikṣuṇīsūtra)⁽¹²⁾では次のように〔説かれている〕。

アーナンダよ、「心を外に置いた後に、心を外に置く」と、その次に、「先と同様にまとめて、わたしの心を外に置いて、解脱する」と如実⁽¹³⁾に知る。とは「標拳」である。残り⁽¹⁴⁾は「詳説」である。

(11) uddeśa/nirdeśa,あるいはその祖型としての aṅga/prāṅga (總/別)の解釈法については大竹[2005:356-357]が、『解深密経』(SNS § X-7, 158.34-159.2):『顕揚聖教論』(T31, 583a):『撰大乘論』§ II.32E (MS I 98.27-99.12):『十地経論』(DBhVy P ni 134a6-7):『阿毘達磨集論釈』第五章の用例を用いて詳述する。なお『阿毘達磨集論釈』の用例は本稿の脚注 no.20 にて取り上げる。

(12) 『雑阿含経』第615経に対応する經典である(CHUNG [2008]に『雑阿含経』第615経の記載なし)。パーリ平行経はSN 47.10 = SN V 154-158.『成実論』(no.1646, T32, 354a20f.)や『顕揚聖教論』(no.1602, T31, 577c27f.)においても引用される重要經典のひとつである。

(13) 『雑阿含経』第615経, T2, 172b12-13: 心於外求, 然後制令求其心, 散亂心不解脫, 皆如實知。

(14) 「残り」に相当する経文については、『釈軌論註』においてグナマティが補足的に引用している。VyYṬ D si 153a2-4; P i 17a6-b2:

〔【例1】残りは「詳説」である。どのように〔経に説かれているの〕か？

「アーナンダよ、この世で、比丘は、身体を身体に沿って見て過ごす(*kāye kāyānupaśyīviharati)。か〔の比丘〕が身体を身体に沿って見て過ごすとき、身体の沈み〔込み〕(*laya)と、心から起こる惛沈(*styāna)が生ずる。アーナンダよ、かの比丘は、〔身体の、〕ある淨妙であり、可愛なる特徴に注意を向けるべきである。

アーナンダよ、かの比丘が、〔身体の、〕ある淨妙であり、可愛なる特徴に注意を向けるとき、〔かの比丘には〕歡喜(*prāmodya)が生ずる。

歡喜〔が生じた〕とき、喜が生ずる(*pramuditasya pṛīti jāyate)。

心に喜〔が生じた〕とき、身体が輕安になる(*pṛītamanaṣaḥ kāyaḥ praśrabhyate)。

身体が輕安〔になった〕とき、樂を感受する(*praśrabdhakāyaḥ sukhaṁ vedayate)。

【例2】同様に、

比丘たちよ、わたしは甚だ若いときに出家した
とは「標拳」である。

非常に若いとき、この上なく若いとき、
とは「詳説」である。本性と時間との二つの殊勝さによって、甚だ若いことを
完全に解説するからである。

残りの⁽¹⁵⁾、完全な幸福の称賛は、〔さらに〕詳細な解説である。甚だ、非常に、
この上なく若いことそのものが広範に解説されるからである。⁽¹⁶⁾

樂を感受〔した〕とき、心は三昧に入る (*sukhitasya cittaṃ samādhīyate)。
心が三昧に入ったとき、アーナンダよ、〔比丘は〕次のように学習する。「お
よそわたしが、自利のために心を外に置くところの自利なるもの、それを獲
得して、ああ、わたしは包摂すべきである」〔と〕。

と広範に説かれている。」

漢訳阿含における平行例は『雜阿含經』第 615 經, T2, 172b13-20: 若比丘於身身觀
念住、於彼身身觀念住已、若身耽睡、心法懈怠、彼比丘當起淨信、取於淨相、起淨
信心。憶念淨相已、其心則悅;悅已、生喜;其心喜已、身則猗息;身猗息已、則受
身樂;受身樂已、其心則定。心定者、聖弟子。當作是學:我於此義、外散之心、攝
令休息。

訳文に添えた梵文は、『俱舍論疏明瞭義』における平行箇所に基づく。AKVy
54.6-8: pramuditasya prītir jāyate. prītamanaṣaḥ kāyaḥ praśrabhyate. praśrabdhakāyaḥ
sukhaṃ vedayate. sukhitasya cittaṃ samādhīyate. samāhitacitto yathābhūtaṃ prajānāti
yathābhūtaṃ paśyati.

(15) 「残り」に相当する経文については、『釈軌論註』においてグナマティが補足的に
引用している。VyYṭṭ D si 153a6; P i 17b4:

「【例2】残り」と詳細に説かれているのは、

「わたしを、喜び、戯れ〔させ〕るため、我が父である、シャーキャ族の
のシュドダーダナ (*Śuddhodana) により、〔わたしは〕王宮内の屋敷〔に〕
囲われていた。」

と広範に説かれてるから、完全な幸福の称賛が広範に解説されるのである。」

(16) 『釈軌論』において引用される経文は、「撰積分」の「次第」(anusamḍhi) 定義箇
所に引用されている。以下に引用経文を**ボールド体**で示す。VyS D hi 55a6-b1; P yi
66b4-7: de la mtsāms sbyar ba ni rnam pa gsum ste / 'di lta ste / yois su rdzogs pa'i mtsāms
sbyar ba dañ / rnam par bśad pa'i mtsāms sbyar ba dañ / bsgrub pa'i mtsāms sbyar ba'o //

rnam pa de gsum gyi mtsāms sbyar ba'i dpe ni bcom ldan 'das kyis **na ni śin tu gzon nu**

【例 3】 同様に、⁽¹⁷⁾

縁起とは何か。すなわち、これがあるときかれが生ずる。これが生起するからかれが生起する。⁽¹⁸⁾

とは「標拳」である。

すなわち、無明を縁として諸行が⁽¹⁹⁾ [生ずる]

と広範に出ているのは「詳説」である。

dañ mchog tu śin tu gźon nu dañ / rab tu śin¹ tu gźon nur rab tu byuñ no źes ji skad
gsuñs pa des ni śin tu gźon nur yoñs su rdzogs pa yin no //

yab zas [D56b1] gtsañ gis na¹ i gnas khañ bzañs rtsig tu bcug par gyur to źes rgya char
gsuñs pa des ni śin tu gźon nur de ñid rnam par bśad pa yin no //

¹śin D : gśin P

Cf. 『顯揚聖教論』 (no.1602) T31, 539b19-24: 次第者。略有三種。一圓滿次第。二解釋次第。三能成次第。爲顯此三次第略引聖教。如世尊言。我出家時盛美第一盛美最極盛美。此言即顯盛美。圓滿次第。又復說言。曾處我父淨飯王宮顏容端正。乃至廣說。此言即顯盛美。

- (17) 縁起の定型句と十二支とを例題とした、uddeśa と nirdeśa については『縁起經釈』冒頭箇所にも解説がみられる。PSVy 613.7-10 (=Tucci [1971: 240.6-241.5]): ādir uddeśo nirdeśasya tatpūrvakatvāt. tena cādīyate yasmāt pratītyasamutpādaḥ. vibhaṅgo¹ nirdeśaḥ. nirdeśa uddeśavacanam uddeśasya sukhenārthagatyartham nirdeśayālpēna yatnena sukham² saṃdhāraṇārtham ca vṛttisūtrabhūtatvāt. evaṃ hi svākhyāto bhavati. samāsato vyāsataś cākhyānāt.

¹ Tucci 1930: vibhaṅge. ² Tucci 1970: mukham.

「初分は、標拳である。詳説はそ〔の標拳〕を前提とするからである。なぜなら、そ〔の標拳〕によって縁起は把握される。分別は、詳説である。詳説とは、標拳についての語である。標拳は、容易に〔法の〕意味内容を理解するためである。そして詳説は、わずかな努力によって容易に〔法の意味内容を〕記憶するためである。〔例えば、〕注解とスートラのようなものだからである。実に以上のようにすれば、「善く解説されたもの」となる。略説として、または広説として、解説されるからである。」

なお『決定義經註』にも『縁起經釈』当該箇所と同趣旨の説明がなされている (AVN 73.4-10; 本庄 [1989: 40-41])。

- (18) NidSa 16.2: pratītyasamutpādaḥ katamaḥ. yad utāsmin satīdam bhavaty asyotpādād idam utpadyate.

- (19) NidSa 16.4: yad utāvidyāpratyayāḥ saṃskārāḥ ...

【例4】同様に⁽²⁰⁾

具寿者たちよ、これら十二が有暇 (*kṣaṇa) となるものである⁽²¹⁾
と説かれているこ〔の経文〕の中で、「自・他〔に関する要件の〕完備」
(*ātmaparasampad) と説かれるのは標挙であり、残り〔の十〕は詳説である。
標挙と詳説の二つによって、十二となる⁽²²⁾。以上〔の経文〕をはじめとする「標
挙」である諸語に関する、目的の意味についても説明されなければならない。

2.3.2 数的表現の説示による「目的の意味」

2.3.2.0 総論 (LEE 28.8-29.8; D śi 38b3-39a2; P si 43b2-44a3)

五蘊や六内処といった、そうしたものの如き、数 (*saṃkhyā) の説かれた
〔諸法〕も、それらの説明されるべき意味が理解されないわけではないので

(20) 『釈軌論』当該箇所における有暇 (kṣaṇa) の議論 (【例4】) と内容を共有する
『阿毘達磨集論釈』の用例を取り上げておく。ASBh 142.15-17: aṅgopāṅgamukhaṃ
yattraikena padenoddeśaḥ śeṣair nirdeśa itī pradarsyate tadyathā dvādaśakṣaṇa'saṃnipādeśānāyām
ātmasampatparasampad ity anayor dvayor yathākramaṃ pañcabhiḥ pañcabhir uttaraiḥ padair
nirdeśa itī.

¹ チベット語訳 (dal ba) に基づき、TATIA: kṣaraṇa を kṣaṇa に訂正する。

「總別門とは、そこで、第一の語によって標挙が、残り〔の語〕によって詳説が
〔それぞれ〕明示されるところのものである。例えば、十二暇の集合
(dvādaśakṣaṇasaṃnipāta) が説かれる場合、自己〔に関する要件の〕完備・他者
〔に関する要件の〕完備 (自他円満) というこの二つ〔の標挙〕に対して、順に、
それぞれ五つの後続する語によって、詳説が〔示される〕。」

(21) *Dīrghāgama* no.2, *Arthavistara* が出典である。AvDh D su 188b3-4; P śu 198a4: de ltar
na tse dañ ldan pa dag dal ba tsoṅs pa bcu gñis po 'di dag ni 'phags pa'i chos 'thob par 'gyur
ba yin no //; 『廣義法門經』(no.97) T1, 919c8: 長老。是十二種。; 『仏説佛說普法義
經』(no.98) T1, 922b18-19: 是爲賢者十二時聚會。

なお本稿における *Dīrghāgama* の numbering は HARTMANN [2004; 125f.] におけるギ
ルギット出土写本のそれに基づく。

(22) 有暇 (kṣaṇa) の自他円満としてグナマティが列挙する語句は、『声聞地』第一瑜
伽処と概ね一致する (ŚrBh I 10.1-16.2; 声聞地研究会 [1998: 10-16])。さらに第一
瑜伽処に説かれる「自他円満」は、先ほど言及した *Arthavistara* に基づくことが
YAMABE [1997: 162-169]; 声聞地研究会 [1998: vi-viii] により指摘されている。
『修所成地』における有暇を取り上げた菅原 [2010: 150; 233f.] と併せて参照。

あれば、「なぜ、数が説かれているのか」という、目的の意味が、説明されなければならない。

【問】同様に、他の語の、説明されるべき意味が、〔世間で〕認知されている場合、そ〔の語〕の意味に効力はないから、それらの〔語の〕目的の意味も、説明されなければならない。例えば、

シュラーヴァスティに向けて遊行に出立した (yena śrāvastī tena cārikām
prakrāntaḥ)⁽²³⁾

という〔経文〕の説明されるべき意味が、世間で認知されているのであれば、なぜ、仏、あるいは声聞は地方を遊行なさるのか (2.3.9; 2.3.10)、同様になぜ、世尊は二ヶ月半〔の間〕、安居なさるのか (2.3.11)、なぜ、同志マハーコーシユティラは同志シャーリプトラが居るところに向けて出発したか (2.3.12)、といったことなどの「目的」も、説明されなければならないのではないか？

【答】その中で、〔世尊が〕お説きになられた諸異門の、目的の意味は、先に解説し終えているのであって、残り⁽²⁵⁾を説明すべきである。

(23) *Vinayavastu* に用例多数。以下その一例：SBhV I 171.19: yena śrāvastī tena cārikām prakrāntaḥ; II 56.18-19: atha bhagavān yathābhiramya rājagrhe vihrtya yena śrāvastī tena cārikām prakrāntaḥ.

(24) 本稿の脚注 no. 47 を参照。

(25) 「先に解説し終えている」箇所とは、『釈軌論』第一章における「目的」(*prayojana*) 定義箇所を指す。ここでは世尊が同義異語を説く「目的」が八項目にわたって提示されている。VyY LEE 10.4-19; D śi 31b7-32a3; P si 35a7-b3:

1. 〔世尊が〕異門をお説きになるのは、所化が多様であるためである。
2. その時に、または後時に、ある人々をして理解させるためと、
3. その時に、〔心が〕散乱している人々に、その同じ表現〔を繰り返すこと〕によっては、他の、〔心が散乱していない〕人々が、〔「どうして無駄に同じ表現を繰り返すのだ」と世尊を〕非難するであろうから、異門（同一の意味をもつ別の表現）でもって、その〔同じ〕意味内容を示すためと、
4. 注意散漫な人々に、繰り返しその〔同じ〕意味を開陳することで、忘れさせないためと、
5. 一つの語にたくさんの意味があるから、異なった意味で理解してしまうのを防ぐためと、
6. 『ニガントウ』 (*Nighaṇṭu, sGra nes par sbyor ba*) のように、別の〔経〕にて、そ

9. まず⁽²⁶⁾, 「標拳」の語 (uddeśavacana) が, 経によって注解された意味内容を記憶させるのと同様に, 要約によって, その広く説かれた意味内容を記憶させるため (samāsenā vistārārvadhāraṇārtham sūtreṇa vṛtyarthārvadhāraṇavat),
10. 略解による知者である所化たちを裨益するため (udghaṭitajñānām vineyānām anugrahārtham),
11. そ〔の略解による知者〕とは別の〔所化の〕者たち (広説による知者 *vipaṅcitajña と言葉〔の暗記〕を最上とする者 *padaparama と) に, 〔または〕後世の者たちに, 略解による知者性の因を蓄積させるため (anyeṣām āyatyām udghaṭitajñatāhetūpacayārtham),
12. 略説〔の〕, また広説の解説に対して能力を有する者たちに正しく示すた⁽²⁷⁾

これらの諸名詞 (*nāman) でもって, そ〔の当該のことば〕の意味を正しく理解させるためと, 説法者 (*dharmakathika) らが, 意味を説明することと理解させることの二つについての巧みな手立て (*upāyakaūśalya) を完成させるためと,

7. [世尊] ご自身に法無礙解がそなわっていることを示すためと,

8. 他人々にその種子を植えつけるためである。」

なおグナマティによる別著『縁起経釈註』にも『釈軌論』当該箇所 (『釈軌論』の記述のうち 5., 7., 8.) と平行する言及がある (PSVYṬ D chi 95a3-b1; P chi 112a5-b4)。さらに, アスヴァパーヴァの『大乘莊嚴経論逐一解釈』(Mahāvāsanāṣūtrāṣṭāṅgikā. D no.4029; P no.5530) も『釈軌論』当該箇所に言及している。MSAṬ D bi 105b5; P bi 218b1: nmam graṅs nmams kyi dgoṅs pa rgyas par ni rNam par bśad pa'i rigs pa las blta bar bya'o // 「諸異門の広範な目的については『釈軌論』を参照すべきである。」

- (26) 当該箇所以下の記述はハリバドラの『現観莊嚴光明論』に引用されている。Cf. AAĀ WOGIHARA 202.24-203.8; VAIDYA 359.30-360.4: uddeśavacanānām nirdeśāt pṛthag abhidheyārtho nāstīti kimartham uddeśavacanam iti cet. ucyate. samāsenā vistārārvadhāraṇārtham sūtreṇa vṛtyarthārvadhāraṇavat. udghaṭitajñānām vineyānām anugrahārtham. anyeṣām āyatyām udghaṭitajñatāhetūpacayārtham. ātmanah samāsvayāsanirdeśavaśītasamdarśanārtham. anyeṣām tathābhyāsenā tadbijāvaropaṇārtham cety ācāryavasubandhuḥ. samkṣiptamātre samāhitam cittam yoginām tadvistarārthe sarvatra katham samāhitam syād ity etadartham nirdeśadeśanā¹. tathā vistaramātre samāhitam cittam yoginām tatsamkṣiptārthe sarvatra katham samāhitam syād ity etadartham uddeśadeśanety² āgamah. evam sarvatra pratipattavyam.

¹nirdeśadeśanā VAIDYA : uddeśadeśanā WOGIHARA

²uddeśadeśanety VAIDYA : nirdeśadeśanety WOGIHARA

- (27) Cf. PSVY 613.10-11 (TUCCI 1971: 241.4-5); samāsato vyāsataś cākhyānāt (mdo dañ rgyas

め ([ātmanah] samāsvyāsānirdeśavaśitāsamdarśanārtham),

13. [それ] 以外の者たちに、以上を反復して行うことを通して、その [略・
広の解説を説示する] 種子を植えつげるためである (anyeṣāṃ tathābhyāseṇa
tadbhāvaropañārtham)。

伝承⁽²⁸⁾では、

要約のみに瑜伽行者たちの心が集中しているとき、どうすれば、その [要
約の] あらゆる詳細な意味に集中するであろうか、と [考えて]、そのため
「標拳」と「詳説」との二つによって説明する (saṃkṣiptamātre samāhitam
cittaṃ yogināṃ tadvistarārthe sarvatra kathaṃ samāhitam syād ity etadarthaṃ
nirdeśadeśanā. tathā vistaramātre samāhitam cittaṃ yogināṃ tatsaṃkṣiptārthe sarvatra
kathaṃ samāhitam syād ity etadarthaṃ uddeśadeśanety āgamaḥ⁽²⁹⁾)

と説かれている。

par yañ bśād pa'i phyir ro //). Tucci [1930 : 613, n.2] (Reprint: Tucci [1971 : 241, n.2])
は『縁起経釈』当該箇所がハリパドラによって参照された点を指摘している。Cf.
AAĀ WOGIHARA 16.17-18; VAIDYA 278.3-4: samāsanirḍiṣṭasya vyāsataḥ cākhyānāt
svākhyātātvaṃ iti punar api vyāsataḥ piṇḍārtho 'bhidhīyate.

(28) 『釈軌論』では、当該箇所のように、「伝承では」(luñ las, *āgame / *ity āgamaḥ)
との言及のもとに、註釈的な、語義解釈的な内容をもつ聖典が多数引用されている。
それらは現存する漢訳四阿含などには比定しえず、むしろ『瑜伽師地論』に比定し
うることも多いが、現時点では出典や平行例が特定できない例も少なくない。詳細
については別稿を期す。

(29) この「伝承」に基づく引用文に関しては、チベット語訳『釈軌論』所引文に比べ、
『現観莊嚴光明論』所引文は分量が多い。以下、後者の和訳。「要約のみに瑜伽行者
たちの心が集中しているとき、どうすれば、その [要約の] 詳細な意味全体に集中
するであろうか、と [考えて]、そのため「詳説」によって説明する。同様に詳述の
みに瑜伽行者たちの心が集中しているとき、どうすれば、その [詳述の] 要約され
た意味全体に集中するであろうか、と [考えて]、そのため「標拳」によって説明す
る、というのが伝承である。」

2.3.2.1 經に数的表現が説かれた「目的」：第一經文 (LEE 29.9-12; D śi 39a2-3; P si 44a3)

〔世尊が〕数をお説きになったのは、

(1) ある〔經文〕は、数えられるべき〔法数〕を限定するためである (saṃkhyeyāvdhāraṇārtham)⁽³⁰⁾。例えば、

「五蘊」〔と〕また「六内処」

と説かれている如くである。

2.3.2.2 第二經文 (LEE 29.12-17; D śi 39a3-4; P si 44a3-5)

(2) 数に言及することによって忘失しないから (avismaraṇāt), ある〔經文〕は、容易に把握するためである (sukhāvabodhārtham)⁽³¹⁾。例えば、

とある〔有情〕の心が、二十一の随煩惱 (*upakleśa) によって汚染されているのであれば、⁽³²⁾

(30) 当該箇所以下、經典において「数」が言及されている理由が八つ挙げられる。その目的のうち、四例がハリバドラによって引用されている。Cf. AAĀ WOGIHARA 9.4-7; VAIDYA 272.29-273.2: saṃkhyāvacaṇam tu śrāvākaparivārāṇām ānanyāt saṃkhyeyāvdhāraṇārtham, pūrvaṃ¹ prabhūtārthasya samāsasaṃkhyāgrahaṇāvismaraṇāt sukhāvabodhārtham, bahuśravaṇagrahaṇabhīrūṇām² śrotrāvdhānārtham, atha vā parimāṇajñāpanārtham upāttam.

¹pūrvaṃ VAIDYA : om. WOGIHARA ²-bhīrūṇām VAIDYA: -bhīruṇām WOGIHARA

『現觀莊嚴光明論』当該箇所の和訳は『佛教學セミナー』本号掲載の兵藤 [2013 : 3] を参照。また『釈軌論』当該箇所に該当するのは以下の箇所。Cf. AAĀ WOGIHARA 9.4; VAIDYA 273.1: saṃkhyeyāvdhāraṇārtham.

(31) Cf. AAĀ WOGIHARA 9.5; VAIDYA 273.1: pūrvaṃ prabhūtārthasya samāsasaṃkhyāgrahaṇāvismaraṇāt sukhāvabodhārtham.

(32) 当該經文の平行資料としては、『中阿含經』第93經「水淨梵志經」；『佛說梵志計水淨經』(no.51) T1, 843c20f.; 『增一阿含經』(no.125) T2, 573c10f. などがある。また当該經文はその一節全体がグナマティによって『釈軌論註』に引用されている。VyYṬ D si 153b7-154a3; P i 18a6-b2:

「とある〔有情〕の心と〔『釈軌論』に〕詳述されているのは、「とある〔有情〕の心が、二十一の雜染によって汚染されているのであれば、その場合、そ〔の有情〕は、「わたしは淨化され、極めて清淨さをもつのである」という心によって、悪処 (*apāya), 悪趣 (*durgati) にも落ち、劣った身体にも生まれる。

と説かれており、『十上 [経]』(Daśottara)でも、

一法は有益である (eko dharmo bahukarāḥ)

と、一中略—

十法は〔有益である〕(daśa dharmā [bahukarāḥ])

に至るまで説かれている如くである。

いかなる二十一〔の随煩惱〕によってか。①悪見 (*durdṛṣṭi) と、②不正なる貪 (*viṣamalobha) と、③貪欲 (*abhidhyā) と、④瞋恚 (*vyāpāda) と、⑤昏沈 (*styāna) と、⑥睡眠 (*middha) と、⑦掉挙 (*auddhatya) と、⑧悪作 (*kaukr̥tya) と、⑨疑 (*vicikitsā) によって心が汚染され (*upakliṣṭa)、怒 (*krodha) と、恨 (*upanāha) と、⑩覆 (*mrakṣa) と、⑪悩 (*pradāsa) と、⑫嫉 (*īrṣyā) と、⑬慳貪 (*mātsarya) と、⑭諂 (*sāthya) と、⑮誑 (*māyā) と、⑯憍 (*mada) と、⑰無慙 (*āhrikyā) と、⑱無愧 (*anapatrāpya) と、⑲慢 (*māna) と、⑳過慢 (*atimāna) と、㉑放逸 (*pramāda) とによって、心が汚染されるのである。」

『中阿含経』第93経「水浄梵志経」、T1, 575a25-b3: 若有二十一穢汚於心者。必至惡處生地獄中。云何二十一穢邪見心穢非法欲心穢惡貪心穢邪法心穢貪心穢恚心穢睡眠心穢調悔心穢疑惑心穢瞋纏心穢不語結心穢慳心穢嫉心穢欺誑心穢諛諂心穢無慚心穢無愧心穢慢心穢大慢心穢心穢放逸心穢若有此二十一穢汚於心者。

- (33) ヴェアスバンドゥ自身が言明するように Daśottara が出典である (Dīrghāgama no.1)。当該経文はその一節全体がグナマティによって『釈軌論註』に引用されている。VYṬṬ D si 154a3-5; P i 18b2-4:

「一法は有益である—中略—十法は〔有益である〕とは、

「友らよ、一法は有益である。すなわち、諸々の善法に対する不放逸がである」—中略—「十法は有益である。十法はよりどころ (主) となるものである。友らよ、この世で比丘は、如来に対して信を確立する」

と、広範に經典に説かれているとおりでである。」

前者の引用は以下の箇所に対応する。Daśo I.1.: eko dharmo bahukara ya(d) u(ta / apramādaḥ kuṣale)ṣu dharmeṣu /; 『長阿含経』「十上経」、T1, 53a2-5: 諸比丘。有一成法。一修法。一覺法。一減法。一退法。一増法。一難解法。一生法。一知法。一證法。云何一成法。謂於諸善法能不放逸。; cf. AKUp HONJŌ no.6065.

後者の引用は以下の箇所に対応する。Daśo X.1.: daśa dharmā bahukarāḥ / daśa nāthakarakā dharmāḥ / iha bhikṣuḥ ... śraddhāniviṣṭā ... /; 『長阿含経』「十上経」、T1, 57a6-9: 復有十成法…云向十成法。謂十救法。

2.3.2.3 第三経文 (LEE 29.18-22; D śi 39a4-5; P si 44a5-6)

(3) ある〔経文〕は、広範に解説されなければならない〔経〕を聞こうとはせず、〔また〕多くを聞き、保持することに怖れをなす者たちに、注意して聴聞させるためである (bahuśravaṇagrahaṇabhīrūṇāṃ śrōtrāvadhānārtham)⁽³⁴⁾。

例えば、

これらは三根である。〔すなわち〕女根、男根、命根であると説かれている如くである。

2.3.2.4 第四経文 (LEE 29.23-27; D śi 39a5-6; P si 44a6-7)

(4) ある〔経文〕は、為すべきことの多さに怖れ抱く者たちに、気力を生じさせるためである。例えば、

比丘たちよ、一法を断ずるべし。さすれば汝は不還 (*anāgamin) になるであろうと、私は約束する⁽³⁵⁾。

と説かれている如くである。

2.3.2.5 第五経文 (LEE 30.1-4; D śi 39a6; P si 44a7-8)

(5) ある〔経文〕は、一つ〔の語〕によって一つの要約を説くためである。

これらが五つになるのであれば、三つにもなり、三つになるのであれば、五つにもなる⁽³⁶⁾。

と説かれている如くである。

(34) Cf. AAĀ WOGIHARA 9.5-6; VAIDYA 273.1-2: bahuśravaṇagrahaṇabhīrūṇāṃ śrōtrāvadhānārtham.

(35) 正確な出典は不明であるが、当該経文は『法蘊足論』に引用されている。『法蘊足論』は各章の冒頭に阿含を引用し、次にそれを註釈するという形式を採っているが(小谷・本庄 [2007: 208, n.8])、当該経文は「雑事品」の冒頭に引用されている。『法蘊足論』(no.1537), T26, 494c3-4: 爾時世尊告苾芻衆。汝等若能永斷一法。我保汝等定得不還一法。謂貪若永斷者。

さらに、当該経文は『俱舍論』「隨眠品」において引用されるものと関連があるようである (HONJŌ no.5031)。本庄 [1982: 36-37] [2000: 60-61] 参照。

(36) *Dīrghāgama* no.17, *Pañcatraya* が出典である。当該経典の梵文写本の現存は確認さ

2.3.2.6 第六経文 (LEE 30.5-7; D śi 39a6-7; P si 44a8-b1)

(6) ある〔経文〕は、分量を知らせるためである (parimāṇajñāpanārtham)⁽³⁷⁾。例えば、

六十からなる賢者の集団 (śaṣṭir bhadravargikāḥ pūgāḥ)⁽³⁸⁾

と説かれている如くである。

2.3.2.7 第七経文 (LEE 30.8-11; D śi 39a7; P si 44b1-2)

(7) ある〔経文〕は、〔二つのものが〕ひとつであることを知らしめるためである。二つの法に関する作用 (*kṛtya), 食 (*āhāra), 対立物 (*vipakṣa) が共通するからである。例えば、

五蓋 (pañca nivarāṇāni)⁽³⁹⁾

〔と〕説かれている如くである。

れているが、その研究は未着手あるいは未公表のようである。そのためチベット語訳校訂版 (SKILLING [1994 : 314]) の該当箇所を示す。Pañcatraya (Tib.) 2.3: lña po de dag yod na gsum du 'gyur la / gsum yod na liar 'gyur te / de ni gsum pa'i chos kyi mam grañs mdor bstan pa yin no //

(37) Cf. AAĀ WOGIHARA 9.6-7; VAIDYA 273.3: atha vā parimāṇajñāpanārtham upāttam.

(38) *Dīrghāgama* no.4, *Catuspariṣat* が出典である。Cf. CPS 22.2; 22.6; SWTF Band III S. 281, s.v. bhadra-varṅika; SBhV I 149.24f. 舟橋 [1987: 156 and 158, n.3] は、いわゆる「六十賢衆」について、「初転法輪の後まだ余り日数の経っていない頃、三十人の貴公子が妻女同伴で遊山をしていて釈尊の教化を受けた賢衆 (bhadravarga) のこと」「夫婦併せての数が六十人である」と記している。Cf. AKBh 212.8; AKVṃ 374.29; HONJŌ no.4028.

(39) 五蓋を主題とする当該箇所は、『俱舍論』「随眠品」第 59 偈およびその註釈と主題を共有する。AKBh 318.7-319.4:

yāni sūtre pañca nivarāṇāny uktāni kāmaccchando vyāpādāḥ styānamiddham aud-dhatyakaukṛtyaṃ vicikitsā ca. tatra kiṃ traidhātukyaḥ styānauddhatyavicikitsā gṛhyante. atha kāmapratisaṃyuktā eva. kevalo 'yaṃ paripūrṇo 'kuśala rāṣir yad uta pañca nivarāṇānīty ekāntākuśalatvavacanāt sūtre.

kāme nivarāṇāni

nānyatra dhātau. kiṃ punaḥ kāraṇaṃ dve styānamiddhe ekaṃ nivarāṇaṃ uktaṃ dve caud-dhatyakaukṛtye ekam.

ekavipakṣāhārakṛtyataḥ.

dvyeekatā (PRADHAN: *dvacyekatā*)

*dvayor ekatā dvyeekatā. vipakṣaḥ pratipakṣo 'nāhāra ity eko 'rthaḥ. styānamiddhayer ekāhāraḥ sūtre 'nāhāraś ca. kaḥ styānamiddhanivarāṇasyāhāraḥ. pañca dharmāḥ. tandrā aratirvijrmbhikā bhakte 'samatā cetaso līnatvam iti. *kaḥ* (PRADHAN: atha) styānamiddhanivarāṇasyānāhāraḥ ālokaśamjñēti. kṛtyamanayor apy ekam. ubhe api hy ete cittam layam codayataḥ. [p.319] auddhatyakaukṛtyayor apy eka āhāra ukta ekonāhāraḥ. *kaś cauddhatyakaukṛtyanivarāṇasyāhāraḥ. catvāro dharmāḥ. jñātivitarko janapadavitarko 'maravitarkaḥ pauraṇasya ca hasitakṛḍītaramitaparibhāvitasyānūsmartā bhavafīti. kaś cauddhatyakaukṛtyanivarāṇasyāhāraḥ. śamatha* iti. kṛtyam apy anayor ekam. ubhe api hy ete cittam avyupaśānta vartayataḥ. ata ekavipakṣāhārakṛtyatvāt dvayor apy ekatvam uktam. (** 内の語句は小谷・本庄 [2007 : L18] 所収の随眠品本論訂正案に基づく修正)*

【問】 經に①欲貪, ②瞋恚, ③昏沈・睡眠, ④掉挙・悪作, ⑤疑という五蓋が説かれたが, その中で, 昏沈・掉挙・疑は三界に属するものが〔「蓋」と〕呼ばれるのか, あるいは, 欲〔界〕に繋がれたもののみが。【答】 經に〔「これら」五蓋は, 完全な, 欠けるところのないこの不善の聚まりである〕と全面的に不善であることが説かれるから,

(59a) 蓋は欲界にある。

他の界にはない。【問】 ではなぜ昏沈・睡眠の二つが一つの蓋として, また, 掉挙・悪作の二つが一つの〔蓋〕として説かれたのか。【答】

(59abc) 対立物・食・作用が共通であるから, 二つが一つとなった。

二つのものが一つ〔の蓋〕とされたことが「二つが一つとなった」〔と言われる〕。対立物 (vipakṣa)・対治 (pratipakṣa)・非食 (anāhāra) は同義である。經に, 昏沈と睡眠について共通の食と非食とが説かれた。「昏沈・睡眠蓋の食は何か。五つの法, [すなわち] けだるさ (tandrā), 退屈 (arati), あくび (vijrmbhikā), 食不平等性 (bhakte śamatā), 心が沈むこと (cetaso līnatvam) である。昏沈・睡眠蓋の非食は何か。光明想である」と。両者の作用もまた共通である。この両者とも心を沈ませるからである。掉挙・悪作についても共通の食, 共通の非食が説かれた。

「では, 掉挙・悪作蓋の食は何か。四つの法, [すなわち,] 親里尋 (jñāti-vitarka), 国土尋 (janapada-vitarka), 不死尋 (amara-vitarka), 以前に笑い, 遊び, 愉しみ, 慣れ親しんだことを思い出すことである。では, 掉挙・悪作蓋の非食は何か。止 (śamatha) である」と。両者の作用もまた共通である。この両者とも心を落ち着かないものにするからである。ゆえに, 対立物・食・作用が共通であるから, 二つのものではあるが一つ〔の蓋〕として説かれたのである。」(小谷・本庄 [2007 : 228-229] より訳文を抜粋)

『俱舍論』当該箇所は二つの出典に言及する (HONJŌ nos.5035, 5036)。HONJŌ no.5035 (yāni sūtre pañca nivarāṇāny uktāni) は, 小谷・本庄 [2007 : 232, n.1] ; 本庄 [1982 : 37] によれば, 『雜阿含經』第 706-710, 715, 716 經等 ; 『中阿含經』第

2.3.2.8 第八経文 (LEE 30.12-15; D śi 39a7-39b1; P si 44b2-3)

(8) ある〔経文〕は、〔仏世尊〕ご自身が、予め、無碍解となっているものの意味内容をお説きになる方であること (*pratisaṃvidbhūtārthabhāṣitvam) を正しく示すためである。〔既に〕解説したとおり〔の軌〕、あるいは他の〔教説〕でも適切である。⁽⁴⁰⁾ 軌なのである。

以上〔のことがら〕などは、〔世尊が〕数をお説きになられた目的である。

2.3.2.9 諸仏が遊行する7つの目的 (LEE 30.16-31.7; D śi 39b1-5; P si 44b3-7)⁽⁴¹⁾

諸仏が遊行なさるのは、七つの要因によってであると知るべきである。

- ①他の場所に居住する人々を教化するため。
- ②そこに居住する人々に〔仏を〕渴仰させるため。
- ③声聞たちが一箇所にながく留まりすぎること防止するため。
- ④〔仏〕ご自身がそ〔の特定の土地〕への愛着をおもちでないことを明示するため。
- ⑤〔諸仏の訪れた〕諸々の場所が聖地(供養の対象)となるため。
- ⑥多数の生類に、か〔の仏〕を近くに拝し、近づくなどすることによって福德を蓄積させるため。
- ⑦疫病や干ばつなどの災禍を鎮静させるためである。

総括偈がある。

- ①他の場所〔にいる所化たち〕を教化するため、②そこに住んでいる者たちに〔仏を〕渴仰させるため、③声聞〔たち〕を複数〔の場所〕に留

98 経 (T1, 582) などである。HONJŌ no.5036 (kevalo 'yaṃ paripūrṇo 'kuśala rāśir yad uta pañca nivarāṇāni) は、小谷・本庄 [2007: 232, n.2]; 本庄 [1982: 38] によれば、『雑阿含経』第 725 経である。このうちのいずれかが『釈軌論』所引経文の出典である可能性がある。

(40) 理解しにくい。

(41) 当該箇所以降のテキストと英訳とが ASSAVA and SKILLING [1999] にある。

まらせるため⁽⁴²⁾、④〔仏は特定の土地への〕愛着をおもちでないことを明示するため。(総括偈第5偈)

⑤諸々の場所が聖地となるため、⑥人々の福德のため、⑦疫病などを鎮めるため、仏は遊行をされた。(総括偈第6偈)⁽⁴³⁾

2.3.2.10 声聞が遊行する15の目的 (LEE 31.8-32.9; D śi 39b5-40a3; P si 44b8-45a7)

声聞たちは十五の要因によって遊行すると知るべきである。

世尊によって「五つの過失 (ādinava), [すなわち,] 過剰にながく留まると、
①為すべきことは多く、為すことは多くなる。②鉢 (*bhāṇḍa) が増し、資具 (*upakaraṇa) が増す。③〔住〕処を惜しみ、〔住〕処に執著する。④住居を惜しみ、住居に執著する。⑤貪 (*rāga) をもったままで〔惜しみつつ〕その地域から立ち去る」と説かれている⁽⁴⁴⁾、①五つの過失を示すためである。

同様に、②衣などを所持しない (*vaikalya) から。

③退屈さ (*arati) によって妨げられるから。

④病によって悩まされるから。

(42) 荻原 [1938 : 732] にも当該偈の和訳がある。そこでは第5偈 c pāda が「弟子に多くの居處あるがため」と訳されている。

(43) 細部においては読みが少しく異なるものの、総括偈第5・6偈は『現觀莊嚴光明論』に引用されている(兵藤 [2010 : 14] における出典不明の韻文は当該偈が出典である)。AAĀ WOGIHARA 7.19-22; VAIDYA 271.30-272.2:

deśāntaravineyārthaṃ tatsthānāṃ tarpaṇāya¹ ca

śrāvakānekavāsārtham anāsakteś ca darśane² //

deśānāṃ caityabhāvārthaṃ puṇyārthaṃ caiva dehināṃ

ītyādisamanārthaṃ³ ca buddhaś carati cārikāṃ //

¹tatsthānāṃ tarpaṇāya VAIDYA : tatsthānāścaryaṇāya WOGIHARA

²anāsakteś ca darśane WOGIHARA : anāsaktiṃ ca darśayan VAIDYA

³ītyādisamanārthaṃ WOGIHARA: ityādiñjāpanārthaṃ VAIDYA

(44) ASSAVA and SKILLING [1999: 21] は類例として AN III 258 を指摘する。漢訳平行経は『増一阿含經』33, 第7經 (T2, 688c4f.)。比丘たちの定住が招く諸過失を取り上げた経典である。

- ⑤ 貪によって悩まされるから。
- ⑥ 人間や人間でないもの（動物）によってなされた〔行為〕でもって、他者により体と心とが傷つけられるから。
- ⑦ 利得（*lābha）等を望むゆえ。
- ⑧ 他者を愛好する（*preman）ゆえ。
- ⑨ 他者に心を寄せる（*anukampā）ゆえ。
- ⑩ 師を尊敬する（*gurugaurava）ゆえ。
- ⑪ 国などへの観光（*kautūhala）のため。
- ⑫ 善品（*kuśalapakṣa）を殊勝なものとするため（*viśeṣārtham）。
- ⑬ 懺悔（*āpattideśanā）のため。
- ⑭ 三宝に恭敬〔させ〕るため。
- ⑮ 聖地を表敬するためである。

総括偈がある。

- ① 五つの過失，②〔衣などを〕所持していないこと，③ 退屈さ，④ 病，
- ⑤⑥ 貪〔など〕によって害されるため，⑦ 利得などへの渴愛，⑧ 愛好，
- ⑨ 情，⑩ 師に対する尊敬によって，（総括偈第 7 偈）
- ⑪〔国などの〕観光，⑫〔善品〕を殊勝なものとするため，⑬ 罪〔を告白すること〕によって，⑭〔三〕宝に恭敬〔させ〕る〔ため〕，⑮ 聖地〔など〕を表敬するため，比丘は遊行をする。（総括偈第 8 偈）⁽⁴⁵⁾

(45) 総括偈第 7・8 偈は『現觀莊嚴光明論』に引用されている（『佛教學セミナー』本号掲載の兵藤 [2013: 7-8, ns.25-7] を参照）。AAĀ WOGIHARA 11.15-18; VAIDYA 274.19-22:

pañcādīnavavaikalyāratirāgādighaṭṭitaḥ
 lābhādīṭṣṇāpriyatānukampāgurugauravaiḥ //
 kautūhalād viśeṣārtham āpattyā ratnakāraṇāt
 caityādivandanārtham ca bhikṣuś caratī cārikām //

2.3.2.11 世尊が安居する目的 (LEE 32.10-24; D śi 40a3-5; P si 45a7-b2)

世尊が、二ヶ月半の間⁽⁴⁶⁾、安居なさるのは、弟子たちに〔法を〕求めさせるためである。これについて、

「今やわたしには、憐れみが希薄であることもなく、法に対する慳貪もない。わたしには、師拳もなく、不可能（能力の欠如）もなく、苦を習慣とすることもない。

わたしの教えは尽きることもない。お前からの見返り〔を求めること〕もない。所化たちは、わたしの〔法〕を理解することができない。〔所化たちは〕敬意をもつものではない。

ゆえに、わたしは〔法を〕説かない」と〔所化に〕知らしめようとし、

〔法を〕求めさせようとして、二ヶ月半の間⁽⁴⁷⁾、世尊は安居なさった⁽⁴⁸⁾。

と説かれている如くである (ces gsuṅs pa lta bu'o)⁽⁴⁹⁾。

(46) 本稿の次注 no.47 を参照。

(47) VyY: zla ba phyed daṅ gsum dag tu //; AAĀ: dvau māsau. ASSAVA and SKILLING [1999: 18] は For a fortnight and for three months と訳し、AAĀ のテキストについては trimāsān との訂正案を示す (同 p.22, n.36)。NANCE [2012: 151] も全く同様に訳し、AAĀ のテキストについては sic とまで記して SKILLING の訂正案を支持する (同 p.252, n.56)。これらは雨安居の期間が三ヶ月であるとの、諸文献に確認される一般的記述に基づいている。しかし zla ba phyed daṅ gsum dag は「三ヶ月半」ではなく「二ヶ月半」を意味するため、SKILLING らによる AAĀ のテキスト訂正案は不要である。AAĀ のチベット語訳テキストにおける訳語も zla ba phyed daṅ gsum dag tu である点 (ASSAVA and SKILLING [1999: 22]) もこの点を補足しよう。

(48) 当該三偈は『現觀莊嚴光明論』に引用されている。AAĀ WOGIHARA 983.11-16; VAIDYA 554.9-14:

na kṛpā mandatedānīṃ na ca me dharmamatsarah /
nācāryamuṣṭir nāśaktir na ca me duḥkhaśīlatā //
na ca me niṣṭhitaṃ śāstraṃ tarkayāmi tavāntikāt /
ājñātum¹ na ca me śaktā² vineyā na ca sādaraḥ //
na deśayāmi³ yeneti jñāpayan paritarṣayan /
dvau māsau pratisaṃlīno bhagavān ardham eva ca //

¹ājñātum VAIDYA : ājñāntum WOGIHARA ²śaktā VAIDYA : śaktāḥ WOGIHARA

³deśayāmi VAIDYA : deṣayāmi WOGIHARA

(49) 当該三偈の引用が ces gsuṅs pa lta bu'o // との句でもって締め括られていることから、

2.3.2.12 マハーコーシュティラがシャーリプトラを訪問する 15 の目的

(LEE 32.25-33.6; D śi 40a5-6; P si 45b2-3)

- ① 福德 (*punya)⁽⁵⁰⁾, ② 智 (*jñāna), ③ 物的報酬 (*āmiṣa), ④ 守護 (*trāṇa),
⑤ 歎び (*nandi), ⑥ 過失の詮索 (*upā lambhaprekṣiṇaḥ)⁽⁵¹⁾, ⑦ 友情 (*mitratā),
⑧ 恩返し (*kṛtajña), ⑨ 福田 (*dakṣiṇeya), ⑩ かれ (シャーリプトラ) や ⑪
[かれ] 以外の者に対する憐れみ,
⑫ 恐れ, ⑬⑭ 二つの呼出 (*kutūhala)⁽⁵²⁾, ⑮ 他への恭順のゆえに。[以上の]
十五の要因によって [マハーコーシュティラは] [シャーリプトラのいる
ところに向けて] 出発したと認められる⁽⁵³⁾。

それが適宜、理解されるべきである。

『釈軌論』第一章の章題 (LEE 33.7-9; D śi 40a6-7; P si 45b3-4)

『釈軌論』より

第一章完結

(「語義」(2) の訳語は以上)

「語義」(2) のまとめ

2.1 は端的に「語によって語られるべきもの」と定義される。具体的には、
『縁起初分別所説〔経〕』(Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśa)⁽⁵⁴⁾の一節を例に、

当該三偈はヴァスバンドゥによって作成されたものではないと推測される。

(50) これらの還元梵語は ASSAVA and SKILLING [1999 : 18-9] の推定に基づく。

(51) Cf. Mvy(IF) 2438: anupā lambhaprekṣiṇaḥ = klaṅ ka mi 'tśol ba. ASSAVA and SKILLING [1999 : 18] は *avatāragaveṣana を原語として想定する。

(52) ASSAVA and SKILLING [1999 : 19, n.27] も述べていることであるが、⑬⑭の内実は不明である。なお同研究は two spectacles との訳語を与えている。

(53) 出典不詳。ASSAVA and SKILLING [1999 : 15-16] は、この二偈の内容が、ある比丘が別の比丘を訪問する際の描写に関する常套句 (stock phrase) であるとし、マハーコーシュティラによるシャーリプトラの訪問であると、ヴァスバンドゥが言明している点から、NidSa 23.3 および SN II 112.27 を参考資料として挙げている。

十二支縁起の中の「無明支」や「行支」など、各支分の「定義」(lakṣaṇa)⁽⁵⁵⁾を個別的に解説するものが「個々に語られるべき〔語の〕意味」だと説明する。つまり *pratyekaikavācārtha とは、個々に言及され、定義されるべき語の意味を指す。ヴァスバンドゥによる解説は以上で尽きており、註釈者グナマティもこの2.1については註釈を施していない。

2.2は端的に「意味内容が異なる諸語の要約された意味なるもの」と定義される。そして㉔㉕二つの事例が例示される。㉔の趣旨は、例えば経に十二有支が煩惱・業・生の三雑染として要約的に説かれている場合の解釈例が解説されている(山口[1959:174])。グナマティの補足によれば、無明、愛、取の三支分を煩惱雑染に、諸行、有の二支分を業雑染に、識および残りの六支分を生雑染に配当させる、最も一般的な分類法を用いている。⁽⁵⁶⁾つまり十二有支の各支分を包摂する「煩惱」「業」「生」の三術語の意味が、「包摂された〔語の〕意味」となる。

㉕は、既に「目的」定義箇所であり取り上げられたのと同じの経文である。当該経文のうち、信・戒・捨・慧の四財は、「繁栄」と「至福」との要因である。ヴァスバンドゥの解説に従えば、信は戒・捨・慧の要因となり、さらに戒・捨・慧はそれぞれ「身体の円満により包摂された繁栄」「享受の円満により包摂された繁栄」「至福」の要因である。つまり信・戒・捨・慧の四財を包摂する「繁栄」「至福」の二術語の意味が「包摂された〔語の〕意味」となる。

(54) *Samyuktāgama*, NidSa sūtra 16; 『雑阿含経』第298経「縁起法性説義経」; 玄奘訳『縁起経』(T. No.124); 単独經典 *Praṭīyasamutpādādivibhaṅganirdeśa* などの原典を指す。当該經典の梵文写本およびその断片・校訂テキスト・先行研究の所在は CHUNG [2008:107-10] が極めて詳細に記述する。当該經典はヴァスバンドゥがその『縁起経釈』において註釈対象とした經典である。

(55) 本稿の脚注 no.5 にて言及した。

(56) 本稿の脚注 no.7 を参照。また、十二支と三雑染の配当をめぐる、『釈軌論』と同様の分類をする『阿毘達磨毘婆沙論』などの用例については舟橋 [1991:17f.] を、『瑜伽師地論』および『解深密経』の用例については舟橋 [1974:193f.] を参照。さらに舟橋 [1991] は、唯一『阿毘達磨集論』のみが当該分類法と異なる配当をしている点を指摘する。

したがって **samgrhītārtha* とは、当該語に下位分類される諸語を内包する、すなわち下位分類を包摂する語の意味を指す。

2.3の表題である **prayojanārtha* という複合語の前肢である **prayojana* は、経に説かれる「標拳と詳説」および「数的表現」の「目的」とみなしうる。両項は、それぞれ上述した如き多様な⁽⁵⁷⁾「目的」をもつ。そしてヴァスバンドゥは、「経」というものを、かかる表現形式をそなえたものとしてみている。こうした態度は、『順正理論』における「上座」が、標拳 (*uddeśa*) と詳説 (*nirdeśa*) をそなえた経を「了義経」と価値付ける態度と共通する。⁽⁵⁸⁾ さらに『俱舍論』においてヴァスバンドゥが、「経からの逸脱」(*utsūtra*) を根拠として他説を排斥するために、その典拠たる「経」がそなえるべき必須要件として挙げられる特徴とも類似する。⁽⁵⁹⁾

以上、簡潔にはあるが「語義」(2)の特徴をまとめた。当該箇所以外に見られる三種の語義解釈法を含む「語義」全体の試論については、本誌次号掲載予定の「ヴァスバンドゥの経典解釈法 (3) —語義 (*padārtha*) —」を参照されたい。

(57) 本稿 pp.11-2 及び no.25 を参照。

(58) 室寺 [2006 : 157-9] ; 箕浦 [2007 : 21] 参照。分位縁起説を正統説と認め、標拳と詳説とをそなえた『縁起経』を不了義とするサンガパドラに対し、『俱舍論』の「経部師」および『順正理論』の「上座」は『縁起経』を了義とする。サンガパドラは、「上座」のように標拳・詳説の有無を了義・不了義の判断基準とすることはしない。

(59) 室寺 [2006] は『俱舍論』における '*utsūtra*' ('経典からの逸脱') を五例取り上げ、ヴァスバンドゥが「経からの逸脱」を根拠として対論者の見解を拒斥するために、その典拠たる「経」がそなえるべき必須要件を抽出した。室寺によれば、それらに共通して認められる必須要件は、「ブッダによって説示された意味領域を限定する語句を必ず伴っていること」、具体的には、"*yat kiñcit tat sarvam*" (漢訳の「彼一切」) という表現を伴って、説示対象の一切切を説く経。または、'*eva*' などの限定詞を伴って、あるいは限定詞がない場合でも '*dvyam*' などの確定表現を伴って、説示内容をはっきりと限定して説く経。または、縁起の各支分について、それぞれの語義要素を残らず列挙するという仕方限定的に説く経である、という。

『俱舍論』におけるこれらの議論が『釈軌論』第一章「語義」(2)、特に2.3と共通する点は注目に値する。

謝辞

『『釈軌論』における阿含經典の語義解釈法』と題する三つの拙稿に掲載した翻訳研究について、その全編にわたり、翻訳の訂正から、『釈軌論』本文の内容理解、引用經文の出典・平行例および参照すべき先行文献の教示に至るまで、本庄良文教授に御指導いただいた。本庄教授よりいただいた御指摘は余りにも多く、拙稿の中に個々には注記しえない。ここに記して、衷心より感謝の意を表する。

**The Tibetan Text of the *Padārtha* (1) and (2) in the First Chapter of
the *Vyākhyāyukti****

Abbreviations

- VyY (D) = Derge blockprint edition of the *Vyākhyāyukti*, D no.4061.
- VyY (P) = Peking blockprint edition of the *Vyākhyāyukti*, P no.5562.
- VyY (L) = LEE Jong Choel's edition of the *Vyākhyāyukti*, LEE [2001].
- VyY(S) = Peter SKILLING's partial edition of the *Vyākhyāyukti*, ASSAVA and SKILLING [1999: 20–3].
- VyYT (D) = Derge blockprint edition of the *Vyākhyāyuktiṭīkā*, D no.4069.
- VyYT (P) = Peking blockprint edition of the *Vyākhyāyuktiṭīkā*, P no.5570.

1 *Padārtha* (1)

1.0 Introduction (D śi 33a6; P si 37a2–3; LEE 13.22–24)

tśig gi don ni⁽¹⁾ brjod pa gañ gis⁽¹⁾ brjod par bya ba gañ yin pa ste / de yañ kha cig ni
gcig la du ma 'byuñ ba dañ / kha cig ni du ma la gcig 'byuñ ba ste /

1.1 *vigata (D śi 33a6–34b3; P si 37a3–38b3; LEE 14.1–16.23)

omitted.

1.2 *rūpa* (D śi 34b3–5; P si 38b4–6; LEE 16.24–17.7)

yañ dper brjod par bya ste / dper na /

gzugs⁽²⁾ źes bya ba ① gzugs phuñ dañ //

② kha dog ③ bsam gtan ④ rnam par 'dren //

gzugs źes bya ba

[L17] ① gzugs kyī phuñ po la ni gzugs la bdag tu rjes su lta źiñ / rnam par źes pa'i bar
du źes 'byuñ ba lta bu'o //

*Except for § 1.1 *vigata*.

1) brjod pa gañ VyY(P) : rjod pa gañ gi VyY(DL). *Read* brjod pa gañ gis.

2) źes VyY(DL) : źes VyY(P)

- ② kha dog la ni mig gis gzugs rnams mthoñ nas zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ③ bsam gtan rnams la ni gzugs kyi 'dod chags dañ / gzugs med pa'i 'dod chags zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ rnam pa la ni gzugs rnams kyi sdug pa'i gzugs dag la kun tu chags zes 'byuñ ba lta bu'o //

1.3 *anta* (D śi 34b5–35a1; P si 38b6–39a2; LEE 17.8–23)

mtha' ni ① zad dañ ② mjug ③ cha dañ //
 ④ ñe dañ ⑤ phyogs dañ ⑥ smad pa la'o //

mtha'i sgra

① zad pa la ni sdug bsñal gyi mthar 'byin zes 'byuñ ba lta bu'o //

② mjug la ni

'tso ba'i mtha' ni 'chi ba yin //

zes 'byuñ ba dañ /

'dir ni 'gro bas 'jig rten mthar //

nam yañ phyin par mi 'gyur ro //

zes 'byuñ ba lta bu'o //

③ cha la ni mtha' gsum ste / 'jig tsoḡs kyi mtha' dañ / 'jig tsoḡs kun 'byuñ ba'i mtha' dañ / 'jig tsoḡs 'gog pa'i [P39a1] mtha'o zes 'byuñ ba lta bu'o //

④ ñe ba la ni sa blañs nas chu'i mthar 'gro'o zes 'byuñ ba lta bu'o //

⑤ phyogs la ni mtha' gañ du phyin zes 'byuñ ba dañ / mtha' gcig tu 'dug go zes 'byuñ ba lta bu'o //

⑥ smad pa la ni 'di ni 'tso ba rnams kyi mtha' ste / [D35a1] 'di lta ste / sloñ mo'i zes bya ba lta bu ste / tha chad do zes bya bar mñon no //

3) mjug VyY(L) : 'jug VyY(DP)

4) pa VyY(DL) : om. VyY(P)

5) gyi VyY(DL) : om. VyY(P)

6) yin VyY(D) : om. VyY(PL)

7) 'jig VyY(DL) : 'jigs VyY(P)

8) blañs VyY(D) : slañs VyY(PL)

9) sloñ VyY(DL) : sloñs VyY(P)

1.4 *agra* (D śi 35a1–5; P si 39a2–8; LEE 17.24–18.19)

mchog gi sgra ni ① gtso bo dañ //

② dañ po ③ rtse mo ④ mdun don dañ //

⑤ tśig dañ ⑥ mañ po dag dañ ni //

⑦ dmigs pa la yañ yod par mthoñ //

[L18] ① gtso bo la ni sems can gañ su dag yod pa de rnams kyi mchog ni de bźin gśegs pa yin par bśad ces 'byuñ ba lta bu'o //

② dañ po la ni stan gyi thog ma dañ / chu'i thog ma dañ / bsod sñoms kyi thog ma źes 'byuñ ba lta bu'o //

③ rtse mo la ni skra'i rtse mos sam / rtswa'i mchog mas sam źes 'byuñ ba lta bu'o //

④ mdun gyi don la ni mdun du 'gro'o źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑤ tśig la ni tśig kyi sa bon źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑥ mañ po la ni khrom gyi ru źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑦ dmigs pa la ni sems rtse gcig pa ñid dañ / sems mi 'brel ba źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑧a ñe bar bsgyur ba dañ bcas na yid bde ba la yañ mthoñ ste / mgu ba ñid du gyur / yid rañs pa ñid du gyur źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑧b blo gcig pa ñid la yañ yod de / ñan thos kyi dge 'dun rnams mthun pa rnams la ltos źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑧c mtha' dag ñid la yañ yod de / rkyen rnams tśogs pa źes 'byuñ ba lta bu'o //

⑧d gźon pa ñid la yañ yod de / lañ tśo gźon nu dañ ldan pa źes 'byuñ ba lta bu'o //

1.5 *loka* (D śi 35a5–b1; P si 39a8–b3; LEE 18.20–19.6)

'jig rten źes bya ① sems can dañ //

② snod dañ ③ sdug bsñal ④ 'gro ⑤ 'dod la'o //

10) tśig VyY(DL) : tśigs VyY(P)

11) sems mi 'brel ba VyY(DPL) : yid brel ba VyYṬ (DP)

12) bsgyur VyY(P) : sgyur VyY(DL)

13) na VyY(P) : pa dañ VyY(DL)

14) yid VyY(PL) : yi VyY(D)

15) bsñal VyY(DL) : sdul VyY(P)

- ① sems can dag la ni chos gsum po [P39b1] 'di dag ni 'jig rten gyi mi 'dod pa dañ / mi sdug pa dañ / mi dga' ba dañ / yid du mi 'on ba'o zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ② snod la ni 'jig rten gyi bar gyi 'jig rten dag yod do zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ③ sdug bsñal gyi bden pa la ni 'jig rten gañ ze na / ñe bar len pa'i [L19] phuñ po lña¹⁸⁾ rnams so zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ 'gro ba la ni lan cig 'jig rten 'dir 'ons na sdug bsñal gyi mthar 'byin to zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑤ 'dod pa rnams la ni kun tu rgyu dag 'dod pa'i yon tan lña po 'di dag ni 'phags pa'i chos 'dul ba la ni 'jig rten zes bya ba'o zes [D35b1] 'byuñ ba lta bu'o //

1.6 *āmiṣa* (D śi 35b1–3; P si 39b4–7; LEE 19.7–19)

zañ ziñ zes bya ① rñed pa dañ //

② 'dod yon ③ gzugs dañ ④ zas la yod //

- ① rñed pa la ni dge sloñ dag ña ni chos kyī bgo skal la spyod ciñ gnas pa yin gyi / zañ ziñ gi bgo skal la spyod pa ni ma yin no zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ② 'dod pa'i yon tan rnams la ni gañ la so so'i skye bo rnams chags pa 'di ni 'jig rten gyi zañ ziñ drag po yin no zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ③ gzugs la ni zañ ziñ dañ bcas pa'i rnam par thar pa gañ ze na / gzugs dañ ldan pa gañ yin pa'o zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ zas la ni lag pa zas dañ 'bags pas chu snod la mi gzuñ²⁰⁾ zes 'byuñ ba lta bu'o // 'jig rten na zañ ziñ gi sgra ni śa la yañ yod do²²⁾ // śa med pa'i zas dañ zes 'byuñ ba lta bu'o //

1.7 *bhūta* (D śi 35b3–7; P si 39b7–40a4; LEE 19.20–20.11)

'byuñ ba zes bya ① skyes ② bden dañ //

③ sa khams sogs dañ ④ 'dus byas dañ //

16) gyi VyY(DL) : om. VyY(P)

17) bden pa VyY(DL) : bde ba VyY(P)

18) lña VyY(PL) : lña po VyY(D)

19) zas VyY(PL) : zad VyY(D)

20) mi VyY(DL) : ma VyY(P)

21) gzuñ VyY(D) : bzuñ VyY(PL)

22) do // VyY(DL) : de / VyY(P)

⑤ yod dañ ⑥ sems can rnams dañ ni //

⑦ mi ma yin pa rnams la yod //

① skyes pa la ni zas bži ni sems can 'byuñ ba rnams gnas pa'i phyir ro žes 'byuñ ba lta bu ste / skyes pa rnams žes bya bar šes so //

② bden pa la ni de yañ [P40a1] dus bžin du smra ba dañ / yañ dag par smra ba yin žes 'byuñ ba lta bu'o //

③ sa'i khams la sogs pa la ni 'byuñ ba chen po bži dag ces 'byuñ ba [L20] lta bu'o //

④ 'dus byas la ni dge sloñ byuñ ba la skyo bar bya ba'i phyir dañ / 'dod chags dañ bral bar bya ba'i phyir dañ / 'gog par bya ba'i phyir žugs pa yin no žes 'byuñ ba lta bu'o //

⑤ yod pa la ni bdag ñid la ji ltar yod pa bžin du smra ba yin žes 'byuñ ba lta bu'o //

⑥ sems can rnams la ni 'byuñ po thams cad la dbyug pa spañs nas žes 'byuñ ba lta bu'o //

⑦ mi ma yin pa rnams la ni /

'byuñ po gañ dag 'dir ni lhags gyur ciñ //

sa'am 'on te bar snañ 'khod pa dag //

ces 'byuñ ba dañ / 'byuñ pos zin pa dañ / 'byuñ po'i sman pa žes 'byuñ ba lta bu'o //

1.8 *pada* (D śi 35b7–36a4; P si 40a4–b2; LEE 20.12–21.4)

pa da žes bya ① mya ñan 'das //

② rkañ pa ③ cha dañ ④ yud tsam dañ //

⑤ gži dañ ⑥ bden gñis ⑦ rkañ pa'i phyogs //

⑧ rjes dañ ⑨ tšig la yod pa yin //

① mya ñan las 'das pa la ni ži ba'i go 'phañ bla na med pa žes 'byuñ ba lta bu'o //

② rkañ [D36a1] pa la ni sems can gañ dag rkañ pa med pa'am / rkañ gñis sam / rkañ mañs sam žes 'byuñ ba lta bu'o //

23) žes VyY(DL) : šes VyY(P)

24) šes VyY(DP) : žes VyY(L)

25) la VyY(DL) : om. VyY(P)

26) la VyY(DL) : pa VyY(P)

27) lhags VyY(P) : lhag VyY(DL)

28) *pa da* VyY(D) : *pā da* VyY(PL)

29) gži VyY(PL) : bži VyY(D)

- ③ cha la ni chos kyi rnam grañs tśig bźi pa źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ yud tsam la ni sems yud tsam yud tsam la ni yi chad ciñ rnam par rtog pa rnams kyi dbañ du soñ źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑤ gźi la ni bag yod pa ni mi 'chi ba'i gźi yin te / bag med pa ni 'chi ba'i gźi yin źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑥ bden pa rnams la ni slob pa'i gźi mthoñ ba źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑦ rkañ pa'i phyogs la ni bram ze bre bo dañ rus gcig pas bcom ldan 'das kyi gom gnas su [P40b1] źabs la 'khor lo dag mthoñ no źes 'byuñ ba lta bu'o //
- [L21] ⑧ rjes la ni /
 mkha' la bya yi rjes bźin du //
 de dag rtogs par dka' ba yin //
- źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑨ tśig la ni legs par bśad pa'i tśig gcig gi don kyañ źes par byas nas źes 'byuñ ba lta bu'o //

1.9 *dharmā* (D śi 36a4–b2; P si 40b2–41a2; LEE 21.5–22.3)

- chos ni ① źes bya ② lam dañ ni //
- ③ mya ñan 'das dañ ④ yid kyi yul //
- ⑤ bsod nams ⑥ tśe dañ ⑦ gsuñ rab dañ //
- ⑧ 'byuñ 'gyur ⑨ ñes dañ ⑩ chos lugs la'o //
- chos kyi sgra
 ① źes bya la ni chos gañ la la 'dus byas sam 'dus ma byas sam de rnams kyi mchog ni 'dod chags dañ bral ba yin par bśad do źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ② lam la ni dge sloñ dag log pa'i lta ba ni chos ma yin la yañ dag pa'i lta ba ni chos yin no źes rgyas par 'byuñ ba lta bu'o //

30) yi VyY(DL) : yid VyY(P)
 31) soñ VyY(DP) : so VyY(L)
 32) la ni VyY(DL) : om. VyY(P)
 33) bya yi VyY(D) : bya'i VyY(PL)
 34) źes bya VyY(L) : źes bya ba VyY(DP)
 35) yañd ag VyY(L)

- ③ mya ñan las 'das pa la ni chos la skyabs su soñ ba zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ yid kyi yul la ni chos kyi skye mched ces 'byuñ ba lta bu ste / de ni yid kho na'i yul yin žiñ yul kho na yin gyi rten ni ma yin no //
- ⑤ bsod nams la ni btsun mo'i 'khor dañ gžon nu rnams dañ lhan cig tu chos spyod ces rgyas par 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑥ tše 'di la ni mthoñ ba'i chos la myoñ bar 'gyur ba dañ / byis pa ni mthoñ ba'i chos gces par 'dzin pa yin zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑦ gsuñ rab la ni 'di la dge sloñ chos šes pa ni 'di lta ste / mdo'i sde dañ / dbyaṅs kyiṅs bśñad pa'i sde dañ zes rgya cher 'byuñ ba lta bu'o //
- [D36b1] ⑧ 'byuñ bar 'gyur ba la ni 'du byed kyi rdzas rnams ni de'i chos so zes 'byuñ ba dañ / de ltar 'di lta ste / lus 'di ni rga ba'i chos yin no zes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑨ ñes pa la ni dge sloñ gi chos bži rnams zes 'byuñ ba lta bu [L22] dañ / [P41a1] de bžin du dge sloñ dag srog gcod pa ni chos ma yin la srog gcod pa spaṅs pa ni chos yin no zes rgya cher 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑩ chos lugs la ni yul chos dañ rigs chos zes 'byuñ ba lta bu'o //

1.10 *prahāṇa* (D śi 36b2-5; P si 41a2-6; LEE 22.4-20)

spaṅs pa zes bya ① btañ ba dañ //

② bral dañ ③ gnon dañ ④ bag la ñal //

bcom pa'o spaṅs pa la sogs pa'i //

spaṅs pa zes bya gñis su bžed //

spaṅs pa zes bya ba

36) nu VyY(P) : nu ma VyY(DL). Cf. ViniśS D ži 162b2: btsun mo'i 'khor dañ / **gžon nu rnams dañ** /.

37) rnams zes VyY(DL) : nam šes VyY(P)

38) lta bu VyY(DL) : om. VyY(P)

39) spaṅs pa VyY(DL) : spañ ba VyY(P)

40) chos VyY(DP) : 'chos VyY(L). Cf. Mvy(IF) no.4959: nīti = chos lugs.

41) gnon VyY(PL) : gnod VyY(D)

42) bton VyY(DPL). *Read* bcom.

43) la VyY(DL) : om. VyY(P)

① btañ ba la ni loñs spyod kyi phuñ po che ba'am / chuñ ba yañ spañs nas zes 'byuñ ba lta bu'o //

② rgyun dañ bral ba la ni sdig pa mi dge ba'i chos skyes pa rnams spañs nas zes 'byuñ ba lta bu'o //

③ 'jig rten pa'i lam gyis gñon pa la ni /⁽⁴⁴⁾ 'dod pa rnams⁽⁴⁵⁾ la 'dod pa'i 'dun pa spañs nas des lan mañ du gnas śiñ / tsañs pa'i 'jig rten dañ skal ba mñam par skyes zes 'byuñ ba lta bu'o //

④ bag la ñal yañ dag par bcom pa la ni kun tu sbyor ba gsum spañs pa las /⁽⁴⁶⁾ rgyun tu žugs pa yin no zes 'byuñ ba lta bu'o //

de bžin du spañs pas spoñ ba dañ / sdom pas spoñ ba dañ / rjes su sruñ bas spoñ ba dañ / bsgom pas spoñ ba ste / ñan thos la bśad pa'i mdo sde gñis las rnam pa gñis su mnam par⁽⁴⁷⁾ phy'e'o //

1.11 *nyāya* (D śi 36b5–37a3; P si 41a6–b4; LEE 22.21–23.20)

tśul gyi sgra ni ① bden pa dañ //

lam dañ 'brel 'byuñ ② rig pa dañ //

③ nes 'byed cha dañ ④ mya ñan 'da' //

⑤ thabs⁽⁴⁸⁾ dañ ⑥ rigs pa ñid la yod //

① sdom gyi tśigs su bcad pa /

bden dañ yan lag brgyad dañ 'byuñ //

žes [L23] bya ba 'di las / 'phags pa'i tśul gyi sgra ni bden pa rnams dañ / lam dañ rten ciñ⁽⁴⁹⁾ 'brel bar⁽⁵⁰⁾ 'byuñ ba la yañ mthoñ ño //

② rig pa rnams la yañ mthoñ ste / bram ze ña ni 'phags pa'i chos 'dul ba 'di la 'phags

44) gnon VyY(DL) : gnod VyY(P)

45) pa VyY(DP) : om. VyY(L)

46) 'dod pa rnams la VyY(DL) : om. VyY(P)

47) las VyY(DPL) : la VyYṬ (DP)

48) spañs pas spoñ ba VyYṬ (DP) : spañs par spoñ ba VyY(P) : spañs par mthoñ ba VyY(DL)

49) sruñ VyY(DL) : bsruñs VyY(P)

50) par VyY(DL) : pa VyY(P)

51) thabs VyY(DP) : thab VyY(L)

52) 'brel bar VyY(DL) : om. VyY(P)

- pa'i tśul⁵³⁾ gsum rig pa yin par smra'o źes 'byuñ ba lta bu ste / [P41b1] 'di las so //
- ③ ñes par 'byed pa'i cha dañ mthun pa nmams la yañ mthoñ [D37a1] ste / gañ su dag dran pa ñe bar gźag pa bźi nmams dañ mi mthun par⁵⁴⁾ byed pa de dag ni 'phags pa'i tśul la de dag gis mi mthun par byas pa yin no źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ④ tśul gyi sgra ni mya ñan las 'das pa la yañ mthoñ ste /
 khyim pa 'am rab tu byuñ ba'am //
 gañ žig yañ dag grub byed la⁵⁵⁾ //
 des ni bla med tśul ñid kyi //
 chos ni kun tu thob par 'gyur //
 źes 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑤ thabs la yañ mthoñ ste /
 tśul gyi brtson 'grus brtsams pa la⁵⁶⁾ //
 bya bar dka' ba ci yañ med //
 ces 'byuñ ba lta bu'o //
- ⑥ rigs pa la ni tśul bźin byed do źes 'byuñ ba lta bu'o //

1.12 *karmānta* (D śi 37a3–7; P si 41b4–42a2; LEE 23.21–24.14)

- las mtha' źes bya ① nor tśol dañ //
 ② gsum ③ bdun spañs pa nmams la'añ yod //
 las kyi mtha'⁵⁷⁾ źes bya ba⁵⁷⁾
- ① nor tśol ba la ni des gal te žiñ dañ / gal te tśoñ gi las kyi mtha' de dañ de byed do źes rgyas par 'byuñ ba lta bu'o //
- ② gsum pa spañs pa la yañ yod de / 'jig rten pa'i yañ dag pa'i las [L24] kyi mtha' gañ⁵⁸⁾ že na źes rgyas par 'byuñ ba nas / srog gcod pa'i bar du spañs nas srog gcod pa las phy-⁵⁹⁾

53) gyis VyY(DL) : gyi VyY(P)

54) par VyY(DL) : pa'i VyY(P)

55) la VyY(PL) : pa VyY(D)

56) gyi VyY(DL) : gyis VyY(P)

57) źes bya ba VyY(DL) : źes pa ni VyY(P)

58) pa VyY(DL) : om. VyY(P)

59) gañže VyY(L)

ir ldog pa yin / de b'zin du 'dod pa las⁶⁰⁾ log par g-yem pa las zes bya ba'i bar du 'byuñ ba lta bu'o //

③ bduñ spañs pa la yañ yod de / las kyi mtha' phun sum t'sogs pa gañ ze na / srog⁶¹⁾ gcod pa spañs pa nas srog⁶²⁾ gcod pa las phyir log pa yin zes bya ba'i bar dañ / de b'zin du t'sig 'khyal ba smra ba las zes bya ba'i bar du 'byuñ ba lta bu'o //

④ las kyi mtha'i sgra ni mt'sams med pa la yañ yod de / log pa'i las kyi mtha' med pa ñid ces gsuñs pa'i phyir te / chos 'dul ba 'di las log ciñ drañ du mi ruñ ba mams ni gañ zag lña dag⁶³⁾ ste / ma [P42a1] gsod⁶⁴⁾ pa dañ zes mdo las rgyas par⁶⁵⁾ gsuñs⁶⁵⁾ pa las so // log pa de mams kyi las kyi mtha' ni log pa'i las kyi mtha' ste / mt'sams med pa lña po dag go // 'di la log pa'i las kyi mtha' med pas na log pa'i las kyi mtha' med pa ste / de dños po ni log pa'i las kyi mtha' med pa ñid do //

1.13 *skandha* (D śi 37a7–b2; P si 42a2–5; LEE 24.15–25.1)

phuñ po zes bya [D37b1] ① spuñs pa dañ //

② phrag pa ③ sdoñ po ④ cha ñid la'o //

phuñ po zes bya ba

① spuñs pa la ni de thams cad gcig tu bsduñ⁶⁶⁾ nas gzugs kyi phuñ po zes bya ba'i grañs su 'gro'o zes bya ba dañ / de b'zin du nor gyi phuñ po chen po bsgrubs nas gnas so zes 'byuñ ba lta bu'o //

② phrag pa la ni dper na mi žig sa las khri'u'i⁶⁷⁾ steñ du 'jog⁶⁸⁾ nas rta'i steñ nas glañ po che'i⁶⁹⁾ phrag pa la žon no zes bya ba'i bar du 'byuñ ba lta bu'o //

③ sdoñ po la ni šin ljon pa rtsa ba dañ ldan pa dañ / sbom pa dañ ldan pa chen po'o zes

60) las VyY(DL) : la VyY(P)

61) srog VyY(DL) : slog? VyY(P)

62) srog VyY(DL) : slog VyY(P)

63) dag VyY(DL) : om. VyY(P)

64) gsod VyY(D) : bsod VyY(PL)

65) gsuñs pa VyY(DL) : gsuñ ba VyY(P)

66) nas VyY(DL) : na VyY(P)

67) khri'u'i VyY(DP) : khri 'u'i VyY(L)

68) 'jog VyY(DL) : 'jogs VyY(P)

69) che'i VyY(DL) : che VyY(P)

'byuñ ba lta bu'o //

④ cha la ni sbyin par bya ba phuñ po gsum dag tu sbyin no zes [L25] 'byuñ ba lta bu'o
//

1.14 *samgraha* (D śi 37b3-6; P si 42a5-42b3; LEE 25.2-22)

bsdu ba zes bya ① rañ bzin dañ //

② rjes su mthun dañ ③ dga' ba dañ //

④ ñams med ⑤ khoñs⁷⁰⁾ su gtogs pa dañ //

⑥ 'dzin par byed dañ don drug go //

① rañ bzin la ni gzugs kyi phuñ po ni skye mched bcu dañ gcig gi phyogs kyis bsdu
so zes 'byuñ ba lta bu'o //

② rañ bzin dañ rjes su mthun pa la ni 'phags pa'i lam yan lag brgyad ni phuñ po gsum
dag gis bsdu so zes 'byuñ ba lta bu'o //

③ dga' ba la ni bsdu ba'i dños po bzi po dag ces 'byuñ ba lta bu'o //

④ yoñs su ñams pa med pa la ni 'di ni dbañ po lña po de dag sdud par byed pa yin te /
'di lta ste / śes rab kyi dbañ po zes 'byuñ ba lta bu'o //

⑤ khoñs su gtogs pa la ni 'gro ba dud 'gro'i skye⁷¹⁾ gnas su soñ [P42b1] ba'i srog chags
gañ su yañ ruñ ba de thams cad kyi rjes ni glañ po che'i rjes su 'dus śiñ 'du ba yin no
zes 'byuñ ba lta bu'o //

⑥ 'dzin par byed pa la ni khañ pa brtsegs pa'i phyam dgu po gañ dag yin pa de dag gi
mchog ni spyi rten yin te / 'di lta ste / sdud pa'i phyir ro zes 'byuñ ba lta bu ste /

de lta bu ni dper brjod⁷²⁾ pa tsam du zad do //

de ltar tśig gcig la don du ma byuñ ba yin te / gañ la gañ rig⁷³⁾ pa de la de brjod par
bya'o //

70) khoñs VyY(PL) : khoñ VyY(D)

71) skye VyY(PL) : skyes VyY(D)

72) brjod VyY(DP) : brjos VyY(L)

73) rig VyY(PL) : rigs VyY(D)

2 *Padārtha* (2)

2.0 D śi 37b6-7; P si 42b3-4; LEE 25.24-26.4

tśig du ma la don gcig pa ni dper na nram grañs kyi tśig lta bu'o //

[L26] gžan yañ don nram pa gsum ste /

2.1 so so re re la brjod par bya ba'i don dañ /

2.2 bsdus pa'i don dañ /

2.3 dgos pa'i don no //

2.1 D śi 37b7-38a1; P si 42b4-5; LEE 26.5-8

de la so so re re la brjod par bya ba'i don ni rjod pa gañ⁷⁴⁾ gi brjod par bya ba yañ yin te / dper na ma rig pa'i [D38a1] rkyen gyis 'du byed nrams žes bya ba la ma rig pa gañ že na / 'du byed nrams gañ že na žes bya ba de lta bu la sogs pa bśad pa gañ yin pa'o //

2.2 D śi 38a1-4; P si 42b5-43a1; LEE 26.9-26

bsdus pa'i don ni don tha dad pa'i tśig nrams kyi don bsdus pa gañ yin pa ste / ji ltar srid pa'i yan lag bcu gñis pa'i tśig nrams kyis⁷⁷⁾ mdor kun nas ñon moñs pa gsum po ñon moñs pa dañ / las dañ / skye ba'i kun nas ñon moñs pa nrams bstan pa lta bu dañ / de bžin du

ma dad pa ni dad pa phun sum tśogs pa la yañ dag par len du 'jug pa nas /

śes rab 'chal ba ni śes rab phun sum tśogs pa'i
bar tśig 'di nrams kyis ni mdor na 'jug pa dañ bcas pa'i mñon par mtho ba dañ nes par legs pa'i rgyu yañ dag par len du 'jug pa yoñs su bstan pa yin te / 'di ltar dad pas tśul khrims la sogs pa la 'jug la / tśul khrims dañ gtoñ ba gñis kyis ni lus dañ loñs spyod

74) rjod VyY(DL) : brjod VyY(P)

75) žes VyY(DL) : śes VyY(P)

76) 'du byed nrams gañ že na VyY(PL) : om. VyY(D)

77) kyis VyY(DL) : kyi VyY(P)

78) ba VyY(DP) : pa VyY(L)

79) la sogs pa la 'jug VyY(DL) : om. VyY(P)

[P43a1] phun sum tšogs pas bsdus pa'i mñon par mtho ba 'thob bo //
śes rab kyis ni ñes par legs pa 'thob bo žes⁽⁸⁰⁾ bya⁽⁸⁰⁾ ba de lta bu la sogs pa'o //

2.3

2.3.0 D śi 38a4-5; P si 43a1-2; LEE 27.2-5

[L27] dgos pa'i don ni mnam grañs gsuñs pa rnam kyis don brjod pa gañ yin pa ste /
de dag la ni so so re re la brjod par bya ba'i don kyañ med la / bsdus pa'i don kyañ med
de / brjod par bya ba gcig tu zad pa'i phyir dañ /

2.3.1 D śi 38a5-b3; P si 43a2-b2; LEE 27.6-28.7

de bžin du bstan pa'i tšig rnam kyañ bśad pa las brjod par bya ba'i don tha dad pa
med pa'i phyir ci'i phyir bstan pa byas žes dgos pa'i don brjod dgos te /

(Ex. 1) ji ltar dGe sloñ ma'i mdo sde⁽⁸¹⁾ las

kun dga' bo yid phyi rol tu bžag nas yid phyi rol tu bžag go sñam pa dañ / de'i 'og
tu sña ma bžin du mñon par bsdus nas bdag gi yid phyi rol tu bžag⁽⁸⁴⁾ ciñ mnam par
grol lo sñam du yañ dag pa ji lta ba bžin du rab tu śes so⁽⁸⁵⁾

žes bya ba ni bstan pa'o //

lhag ma ni bśad pa'o //

(Ex. 2) de bžin du

dge sloñ dag ña ni śin tu gžon nur rab tu byuñ ño

žes bya ba ni bstan pa'o //

mchog tu gžon nu dañ rab tu gžon nu

žes bya ba ni bśad pa yin te / rañ bžin dañ dus kyis khyad par gñis kyis śin tu gžon pa
ñid rdzogs par bśad pa'i phyir ro //

lhag ma bde [D38b1] ba phun sum tšogs pa yañ dag par bśağs pa ni rgyas par bśad⁽⁸⁶⁾
pa yin te / mchog tu rab tu śin tu gžon pa de ñid rgyas par bśad pa'i phyir ro //

80) bya ba VyY(DL) : om. VyY(P)

81) ma'i VyY(PL) : ma'i don VyY(D)

82) tu VyY(PL) : du VyY(D)

83) tu VyY(PL) : du VyY(D)

84) tu VyY(PL) : du VyY(D)

85) du VyY(DL) : om. VyY(P)

86) par VyYṬ (DP) : pa VyY(DPL)

(Ex. 3) de bžin du

rten cin 'brel bar 'byuñ ba gañ že na / 'di lta ste / 'di yod pas 'di 'byuñ 'di skyes pa'i
phyir 'di skye

žes bya ba ni bstan pa'o //

'di lta ste / ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnams

žes rgyas par 'byuñ ba ni bšad pa'o //

(Ex. 4) [L28] de bžin du

tše dañ ldan pa dag bcu gñis po 'di dag ni khom par gyur pa [P43b1] yin no

žes 'byuñ ba 'di las bdag dañ gžan phun sum tšogs pa žes 'byuñ ba ni bstan pa yin la /
lhag ma ni bšad pa yin te / bstan pa dañ bšad pa gñis kyis bcu gñis su 'gyur te / de lta
bu la sogs pa bstan pa'i tšig rnams kyi dgos pa'i don yañ brjod dgos so //

2.3.2

2.3.2.0 D ši 38b3–39a2; P si 43b2–44a3; LEE 28.8–29.8

de bžin du tšig gžan gañ dag gi brjod par bya ba'i don ni grags na / de'i don gyi nus
pa ñid⁸⁷⁾ ma yin pas de dag gi⁸⁸⁾ dgos pa'i don yañ brjod dgos te / dper na

mñan yod ga la ba der rgyu žin gšegs so

žes bya ba'i brjod par bya ba'i don ni 'jig rten na grags na / ci'i phyir sañs rgyas sam ñan
thos ljoñs rgyu žin gšegs pa dañ / de bžin du ci'i phyir bcom ldan 'das zla ba phyed dañ
gsum nañ du yañ dag par 'jog par mdzad pa dañ / ci'i phyir tše dañ ldan pa gsus po che
chen po tše dañ ldan pa śa ri'i bu ga la ba der soñ no žes bya ba de lta bu la sogs pa'i
dgos pa yañ brjod dgos so že na / de la rnam grañs gsuñs pa dag gi dgos pa'i don ni
sñar bšad par zad kyi lhag ma rnams brjod par bya ste /

9. re žig bstan pa'i tšig ni mdos 'grel pa'i don 'dzin par byed pa bžin du bstan pa
tsam gyis de bšad pa'i don 'dzin par bya ba'i phyir dañ /

10. gdul bya mgo smos pas go ba rnams rjes su gzuñ⁹¹⁾ ba'i phyir dañ /

87) ñid VyY(DL) : ñid ni VyY(P)

88) gi VyY(DL) : gis VyY(P)

89) ba VyY(DL) : bar VyY(P)

90) bya VyY(DL) : ba VyY(P)

91) gzuñ VyY(D) : bzun VyY(PL)

11. de las gźan pa rnamś [D39a1] la tse⁹²⁾ phyi ma la mgo smos pas go ba ñid⁹³⁾ kyi rgyu⁹³⁾
 bsags pa'i phyir dañ /
12. bsdu ba dañ rgyas par [P44a1] bśad pa la mña' ba dañ ldan pa yañ dag [L29] par
 bstan pa'i phyir dañ /
13. gźan rnamś de lta bu la goms pa las de'i sa bon bskyed pa'i phyir ro //

luñ las

bstan pa tsam la ni rnal 'byor pa rnamś kyi semś mñam par gźag pa yin na / ji ltar
 na de rgyas pa'i don thams cad la mñam par⁹⁴⁾ gźag par 'gyur žig gu / žes de'i don du
 bstan pa dañ bśad pa gñis kyis bstan to

žes 'byuñ ño //

2.3.2.1 D śi 39a2-3; P si 44a3; LEE 29.9-12

grañś gsuñś pa ni /

kha cig ni bgrañ bar bya ba ñes par gzuñ⁹⁵⁾ ba'i phyir te / dper na
 phuñ po lña mams dañ / nañ gi skye mched drug mams

žes 'byuñ ba lta bu'o //

2.3.2.2 D śi 39a3-4; P si 44a3-5; LEE 29.12-17

grañś smos pas mi brjed pa'i phyir kha cig ni bde blag tu gzuñ⁹⁶⁾ ba'i phyir te / dper na
 gañ la la'i semś ñe ba'i ñon moñś pa ñi śu rtsa gcig⁹⁸⁾ gis ñe bar ñon moñś pa can yin na

žes 'byuñ ba dañ / bCur bskyed pa las kyañ /

chos gcig ni gces spras su byed pa yin te

žes bya ba nas

⁽¹⁰⁰⁾ ⁽¹⁰⁰⁾
 chos bcu'i

bar du 'byuñ ba lta bu'o //

92) tse VyY(PL) : om. VyY(D)

93) kyi rgyu VyYṬ (DP) : kyiś VyY(DPL). Cf. AAĀ WOGIHARA 203.3: udghaṭajñatāhetu.

94) gźag VyY(DL) : bźag VyY(P)

95) gzuñ VyY(DL) : bzuñ VyY(P)

96) tu VyY(DL) : du VyY(P)

97) gzuñ VyY(PL) : bzuñ VyY(D)

98) rtsa VyY(DL) : om. VyY(P)

99) spras VyY(D) : sbras VyY(PL)

100) sa bcu'i VyY(DPL). *Read* chos bcu'i.

2.3.2.3 D śi 39a4-5; P si 44a5-6; LEE 29.18-22

kha cig ni gañ dag rgyas par bśad par dgos pas ñan par mi byed pa mañ du mñan pa
dañ / gzuñ¹⁰¹⁾ bas 'jigs pa ñan du gźug pa'i phyir te / dper na

'di dag ni dbaň po gsum po dag ste / mo'i dbaň po dañ pho'i dbaň po dañ srog gi
dbaň po

žes 'byuň ba lta bu'o //

2.3.2.4 D śi 39a5-6; P si 44a6-7; LEE 29.23-27

kha cig ni bya ba mañ pos 'jigs pa dag spro ba bskyed pa'i phyir te / dper na
dge sloň dag chos gcig spoňś śig dañ khyed phyir mi 'oň bar 'gyur bar ñas khas len¹⁰³⁾
te

žes 'byuň ba lta bu'o //

2.3.2.5 D śi 39a6; P si 44a7-8; LEE 30.1-4

[L30] kha cig ni gcig gis gcig bsdu ba bstan pa'i phyir te / dper na
'di dag ni lña dag tu gyur na gsum dag tu 'gyur la gsum dag tu gyur na lña dag tu¹⁰⁴⁾
'gyur ro¹⁰⁵⁾

žes 'byuň ba lta bu'o //

2.3.2.6 D śi 39a6-7; P si 44a8-b1; LEE 30.5-7

kha cig ni tśad śes par bya ba'i phyir te / [P44b1] dper na
bzaň po'i sde pa drug cu dag gi tśogs

¹⁰⁶⁾žes 'byuň ba lta bu'o //

2.3.2.7 D śi 39a7; P si 44b1-2; LEE 30.8-11

kha cig ni dños po gcig tu śes par bya ba'i phyir te / chos gñis kyi bya ba dañ zas dañ
gñen po mtśuňś pa'i phyir na / dper na

sgrib pa lña rnamś

'byuň ba lta bu'o //

101) gzuñ VyY(D) : bzuñ VyY(PL)

102) spro ba(DP) : sprob VyY(L)

103) ñas VyY(DL) : om. VyY(P)

104) gsum dag tu 'gyur la VyY(DP) : om. VyY(L)

105) gyur VyY(DP) : 'gyur VyY(L)

106) žes VyY(DL) : śes VyY(P)

2.3.2.8 D śi 39a7–39b1; P si 44b2–3; LEE 30.12–15

kha cig ni [D39b1] ñid la sña nas so so yañ dag par rig par gyur pa'i don gsuñ ba ñid¹⁰⁸⁾
du yañ dag par bstan pa'i phyir te / ji skad du bśad pa'am gźan las kyañ ruñ ste / gar¹⁰⁹⁾
rigs pa'o //

de lta bu la sogs pa ni grañs gsuñs pa'i dgos pa yin no //

2.3.2.9 D śi 39b1–5; P si 44b3–7; LEE 30.16–31.7

sañs rgyas mams rgyu žiñ gśeğs pa ni rgyu bdun dag gis rig par bya ste /

- ① yul gźan na 'khod pa rnams 'dul ba'i phyir dañ /
 - ② de na 'khod pa rnams skom par bya ba'i phyir dañ /
 - ③ ñan thos rnams gcig na ha cañ yun riñ du gnas pa spañ ba'i phyir dañ /^(110 110)
 - ④ ñid de la chags pa mi mña' bar yañ dag par bstan pa'i phyir dañ /
 - ⑤ yul rnams mchod rten du 'gyur ba'i phyir dañ /
 - ⑥ srog chags mañ po rnams de'i druñ du blta ba dañ 'gro ba la sogs pas bsod nams
bskyed pa'i phyir dañ /
 - ⑦ yams kyi nad dañ than pa la sogs pa'i skyon rab tu ži bar bya ba'i phyir ro //
- bsdus pa'i tśigs su bcad pa ni /

① yul gźan 'dul bar bya phyir dañ //

[L31] ② de na 'khod pa skom¹¹¹⁾ bya'i phyir //

③ ñan thos du ma gnas bya'i phyir //

④ chags pa mi mña' bstan phyir dañ // (Samgrahaśloka 5)

⑤ yul rnams mchod rten¹¹²⁾ bya'i phyir //^(113 113)

⑥ lus can rnams kyi bsod nams phyir //

⑦ yams nad la sogs ži¹¹⁴⁾ bya'i phyir //

sañs rgyas rgyu žiñ gśeğs par mdzad // (Samgrahaśloka 6)

107) sña VyYṬ (DP) : lña VyY(DPL)

108) ba VyY(D) : pa VyY(PL)

109) ste VyY(PL) : te VyY(D)

110) spañ ba'i VyY(D) : spañs pa'i VyY(PS) : spañ pa'i VyY(L)

111) skom VyY(PLS) : bsgom VyY(D)

112) mchod VyY(PLS) : mchog VyY(D)

113) bya'i phyir VyY(PLS) : phyir dañ VyY(D)

114) ži VyY(DS) : žes VyY(PL)

2.3.2.10 D śi 39b5–40a2; P si 44b8–45a5; LEE 31.8–29

ñan thos dag ni rgyu bco lña dag gis rgyu bar rig par bya ste /

- ① ji skad du bcom ldan ¹¹⁵⁾ 'das kyis ñes dmigs lña dag ste / ha cañ yun riñ du gnas na ^① bya ba mañ žiñ byed pa mañ ba yin pa dañ / ② snod spyad [P45a1] mañ žiñ ¹¹⁶⁾ 'tsog chas mañ ba yin pa dañ / ③ gnas la ser sna byed ciñ gnas la žen pa yin pa dañ / ④ khyim la ser sna byed ciñ khyim la žen pa yin pa dañ / ⑤ chags pa dañ bcas ¹¹⁷⁾ pa bžin du gnas de nas 'gro bar byed do žes 'byuñ ba'i ñes dmigs lña bstan pa'i phyir dañ /
- ② de bžin du chos gos la sogs pa dañ mi ldan pa'i phyir dañ /
- ③ mi dga' bas gnod pa'i phyir dañ /
- ④ nad kyis ¹¹⁸⁾ gzir ba'i phyir dañ /
- ⑤ 'dod chags kyis ¹¹⁹⁾ gzir ba'i phyir dañ /
- ⑥ mi dañ mi ma yin pas byas pas gžan ¹²⁰⁾ gyis lus dañ sems la gnod pa byed pa'i phyir dañ /
- ⑦ rñed pa la sogs pa 'dod [D40a1] pa'i phyir dañ /
- ⑧ gžan la dga' ba'i phyir dañ /
- ⑨ gžan la sñiñ ¹²¹⁾ brtse ba'i phyir dañ /
- ⑩ bla ma la že sar bya ba'i phyir dañ /
- ⑪ yul la sogs pa la ltad mo lta ba'i phyir dañ /
- ⑫ dge ba'i phyogs khyad par du bya ba'i phyir dañ /
- ⑬ ltuñ bšags pa'i phyir dañ /
- ⑭ dkon mchog gsum la bkur ¹²³⁾ sti bya ba'i phyir dañ /
- ⑮ mchod rten la phyag bya ba'i phyir ro //

115) kyis VyY(DLS) : kyi VyY(P)

116) 'tsog VyY(DS) : mtšog VyY(PL)

117) pa VyY(D) : om. VyY(PLS)

118) gzir VyY(DPS) : gzer VyY(L)

119) gzir VyY(DPS) : gzer VyY(L)

120) gyis VyY(PS) : gyi VyY(DL)

121) brtse VyY(DS) : rtse VyY(PL)

122) že sa bya ba'i VyY(DPS) : žes bya ba'i VyY(L). *Read* že sar bya ba'i.

123) sti VyY(DPL) : bsti VyY(S)

124) bya VyY(DL) : 'tsal VyY(PS)

[L32] bsdus pa'i tśigs su bcad pa ni /

- ① ñes dmigs lña dan ② mi ldan dan //
③ mi dga' ④ nad ⑤⑥ chags gnod pa'i phyir //
⑦ rñed sogs sred dan ⑧ dga' ba dan //
⑨ sñiñ brtse ⑩ bla ma ¹²⁵že sa dan // (Samgrahaśloka 7)
⑪ ltad mo ⑫ khyad par bya phyir dan //
⑬ ltuñ ba ⑭ dkon mchog bkur sti'i phyir //
⑮ mchod rten phyag ni bya ba'i phyir //
dge sloñ rgyu žiñ 'gro bar byed // (Samgrahaśloka 8)

2.3.2.11 D śi 40a3–5; P si 45a7–b2; LEE 32.10–24

bcom ldan 'das zla ba phyed dan gsum nañ du yañ dag par 'jog par mdzad pa ni ñan
thos nmams skom par bya ba'i phyir te / 'dir /

- da ltar ña ni sñiñ brtse ba //
mi chuñ chos la'añ ser sna med //
dpe mkhyud med ciñ mi nus med //
ña ni sdug bsñal rañ bžin min //
ña yi ¹²⁸bstan pa ma zad la //
khyed las re ba'añ yod min te //
[P45b1] 'dul bas ña'i šes mi nus šin //
gus dan bcas pa'añ med pas na //
des na bstan par mi bya bar //
mkhyen ciñ skom par bya ba'i phyir //
zla ba phyed dan gsum dag tu //
bcom ldan nañ du yañ dag 'jog //

ces gsuñs pa lta bu'o //

125) že sa VyY(DPS) : žes bya VyY(L)

126) btuñ VyY(DPLS). *Read* ltuñ. Cf. AAĀ WOGIHARA 11.17: āpattiyā = ltuñ.

127) phyed VyY(DLS) : phye VyY(P)

128) ña yi VyY(DLS) : ña'i VyY(P)

2.3.2.12 D śi 40a5-6; P si 45b2-3; LEE 32.25-33.6

① bsod nams ② ye śes ③ zañ ziñ ④ skyabs¹²⁹⁾ //

⑤ dga' dañ ⑥ klan ka btsal ba dañ //

⑦ bśes¹³⁰⁾ dañ ⑧ byas gzo ⑨ yon gnas dañ //

[L33] ⑩ de dañ ⑪ gźan la sñiñ¹³¹⁾ brtse dañ //

⑫ 'jigs dañ ⑬⑭ ltad mo gñis dañ ni //

⑮ gźan gyi rjes su 'brañ ba'i phyir //

rgyu ni bcu dañ lña rnam kyis //

soñ ba yin par rab tu 'dod //

de ni ci rigs par rig par bya'o //

Chapter Colophon (D śi 40a6-7; P si 45b3-4; LEE 33.7-9)

rnam par bśad pa'i rigs pa las /

le'ur byas pa dañ po'o //

略号と参考文献

D Derge (sDe dge) blockprint edition of the Tibetan Tripiṭaka.

HONJŌ no. 本庄 [1984] における『俱舍論』および『ウパーイカー』所依阿舎の通し番号。

L/LEE LEE Jong Choel's Tibetan edition of the *Vyākhyāyukti* = LEE [2001].

P Peking (Kangxi 1717/20) edition of the Tibetan Tripiṭaka kept in the Otani University, Kyoto.

SHT Ernst WALDSCHMIDT et al., *Sanskrihandschriften aus den Turfanfunden*. Wiesbaden /Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1965ff.

SWTF Heinz BECHERT et al., *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973ff.

T 高楠順次郎, 渡邊海旭 [編], 大正新脩大藏經。東京: 大正新脩大藏經刊行會, 1924-1932.

129) skyabs VyY(DL) : bskyab VyY(PS)

130) bśes VyY(PLS) : śes VyY(D)

131) gźan la sñiñ VyYṬ (DP) : gźan dañ gñis VyY(DPLS)

一次文献

パーリ仏典の略号については *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。

- AAĀ *Abhisamayālaṅkāralokā* (Haribhadra): WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1932–1935; Paraśurāma Lakshmaṇa VAIDYA (Ed.), Darbhanga 1960.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): Pralhad PRADHAN (Ed.), Patna 1967.
- AKUp *Abhidharmakośaṭīkopāyikā* (Śamathadeva): D no.4094; P no.5595.
- AKVṽ *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): WOGIHARA Unrai (Ed.), Tokyo 1932–1936.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra?): Nathmal TATIA (Ed.), Patna 1976.
- AvDh *Arthavistaro nāma dharmaparyāya*. D no.318; P no.984.
- AVN *Arthaviniścayanibandhana* (Vīryaśrīdatta): Narayan Hemandas SAMTANI (Ed.), Patna 1971.
- Avś *Avadānaśataka*. Jacob Samuel SPEYER (Ed.), St. Petersburg 1902–1909.
- CPS *Catuṣpariṣatsūtra*. Ernst WALDSCHMIDT (Ed.), Berlin 1952, 1957, 1962.
- Daśo *Daśottarasūtra*. Kusum MITTAL (Ed.), Berlin 1957 (I–VIII); Dieter SCHLINGLOFF (Ed.), Berlin 1962 (IX–X).
- DBhVṽ *Daśabhūmikavyākhyā* (Vasubandhu): D no.3993; P no.5494.
- MAVBh *Madhyantavibhāṅgabhāṣya* (Vasubandhu): NAGAO Gadjin (Ed.), Tokyo 1964.
- MS *Mahāyānasamgraha* (Asaṅga): NAGAO Gadjin (Ed.), Tokyo 1982.
- MSAṬ *Mahāyānasūtrālaṅkāraṭīkā* (Asvabhāva): D no.4029; P no.5530.
- Mvy(IF) *Mahāvvyūtpatti*. ISHIHAMA Yumiko and FUKUDA Yōichi (Eds.), Tokyo 1989.
- NidSa *Nidānasamyukta*. Chandrabhāl TRIPĀṬHĪ (Ed.), Berlin 1962.
- Pañcatraya*(Tib) *Pañcatraya-nāma-mahāsūtra*. SKILLING [1994: 310–313].
- PSVṽ *Praṭītyasamutpāḍavyākhyā* (Vasubandhu): TUCCI [1930] (= [1971]).
- PSVṽṬ *Praṭītyasamutpāḍādivibhaṅganirdeśaṭīkā* (Guṇamati): D no.3996; P no.5497.
- ŚrBh I *Śrāvakahūmi*. 声聞地研究会 (Ed.), Tokyo 1998.
- SBhV *Saṅghabhedavastu*. Raniero GNOLI (Ed.), Roma 1977, 1978.
- SNS *Samdhinirmocanasūtra*. Étienne LAMOTTE (Ed.), Louvain 1935.
- ViniśS *Viniścayasamgrahaṇī*: D no.4038; P no.5539.
- VyS **Vyākhyāsamgrahaṇī*: D no.4042; P no.5543.
- VyY *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu): D no.4061; P no.5562; LEE [2001].
- VyYṬ *Vyākhyāyuktiṭīkā* (Guṇamati): D no.4069; P no.5570.

二次文献

上野牧生

2009 「『釈軌論』の経典註釈法とその典拠」『佛教學セミナー』89：1–21.

2010 「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法 (1)」『印度哲学仏教学』25：71–84.

2012 「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法 (2)」『佛教學セミナー』95：1–35.

大竹晋

2005『十地經論 I』（新国訳大藏經 14， 釈經論部 16）， 東京：大蔵出版。

荻原雲來

1938『荻原雲來文集』 東京：荻原博士記念會。（再版：山喜房佛書林， 1972）

小谷信千代

2000『法と行の思想としての仏教』 京都：文栄堂。

小谷信千代・本庄良文

2007『俱舎論の原典研究随眠品』 東京：大蔵出版。

櫻部建

1969『俱舎論の研究界・根品』 京都：法蔵館。

声聞地研究会

1998『瑜伽論声聞地第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』 東京：山喜房佛書林。

菅原泰典

2010『『修所成地』の研究Ⅱ』 仙台：私家版。

兵藤一夫

2010「ハリバドラ『八千頌般若經解説 現觀莊嚴論光明』 試訳（1）」『佛教學セミナー』 92：1-20.

2013「ハリバドラ『八千頌般若經解説 現觀莊嚴論光明』 試訳（2）」『佛教學セミナー』 97：1-31.

舟橋一哉

1987『俱舎論の原典解明 業品』 京都：法蔵館。

舟橋尚哉

1974「中辺分別論における煩惱と業」『佛教學セミナー』 20：192-207.

1991「『大乘阿毘達磨集論』と初期唯識論書との先後について—十二有支と三雜染との関係を中心として—」『佛教學セミナー』 54：15-37.

本庄良文

1982「シャマタデーヴァの俱舎論註—随眠品—」『南都仏教』 49：19-41.

- 1984『俱舍論所依阿舍全表Ⅰ』京都：私家版。
1989『決定義經・註：梵文和譯』京都：私家版。
2000「シヤマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—随眠品・定品—」『神戸女子大学教育諸学研究論文集』14：55-70.

堀内俊郎

- 2009『世親の大乗仏説論—『釈軌論』第四章を中心に—』東京：山喜房佛書林。

箕浦暁雄

- 2007「分位縁起の正当性に関する『順正理論』の議論」『大谷學報』86-2：18-29.

宮下晴輝

- 1983「アビダルマ教義学の一局面——『俱舍論』から『釈軌論』への展開例」『大谷學報』63-1：1-16.

室寺義仁

- 2006「『阿毘達磨俱舍論』における‘utsūtra’」『印度学仏教学研究』54-2：958-954.

山口益

- 1959「世親の釈軌論について」『山口益仏教学文集』下，東京：春秋社，1973，153-188.

ASSAVA-VIRUL-HA-KARN, Prapad and SKILLING, Peter

- 1999 “Vasubandhu on Travel and Seclusion,” *Manuṣya. Journal of Humanities*, 2-1 (Chulalongkorn University, Bangkok): 13-24.

CHUNG, Jin-il (鄭鎮一)

- 2008 *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama*. 東京：山喜房佛書林。

HARTMANN, Jens-Uwe

- 2004 “Contents and Structure of the *Dīrghāgama* of the (Mūla-) Sarvāstivādins,” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 7: 119-137.

LEE, Jong Choel (李鐘徹)

- 2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*. Tokyo: Sankibo Press.

NANCE, Richard F.

2012 *Speaking for Buddhas: Scriptural Commentary in Indian Buddhism*. New York: Columbia University Press.

SKILLING, Peter

1994 *Mahāsūtras: Great Discourses of the Buddha*, Vol. I: Texts. Oxford: The Pali Text Society.

1996 "Verses associated with the *Rāhula-sūtra," *Suhrlekkhāḥ : Festgabe für Helmut Eimer*. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica 28: 201-226.

2000 "Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature," *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23-2: 297-350.

TUCCI, Giuseppe

1930 "Fragment from the Praṭītyasamutpāda-vyākhyā of Vasubandhu," *Journal of Royal Asiatic Society* 1930: 611-630. (Reprint: *Opera Minora* parte I, Roma 1971, 277-304).

VERHAGEN, Pieter C.

2005 "Studies in Indo-Tibetan Buddhist Hermeneutics (4): The *Vyākhyāyukti* of Vasubandhu," *Journal Asiatique* 293: 559-602.

YAMABE Nobuyoshi (山部能宜)

1997 "An Shigao as a Precursor of the Yogācāra Tradition: A Preliminary Study," 『佛教思想文化史論叢 渡邊隆生教授還暦記念論集』 京都：永田文昌堂，153-194.

上野牧生「ヴァスバンドウの經典解釈法（2）—要義（*piṇḍārtha*）—」
『佛教學セミナー』第96号の訂正表

頁数	行数	誤	正
(37) 本文	6	P i 9a7-b7	P i 9a7-b4
(48) 本文	7	D śi 26b6	D śi 26b6-7
(48) 本文	8	P si 29a7	P si 29a7-8
(49) 本文	2	AKVy 442.20-26	AKVy 522.20-26
(49) 脚注	5	AKVy 442.20-26	AKVy 522.20-26
(49) 脚注	7	『雑阿含經』第490經	『雑阿含經』第39經
(49) 脚注	14	AKBh 366.20f.	AKBh 376.20f.